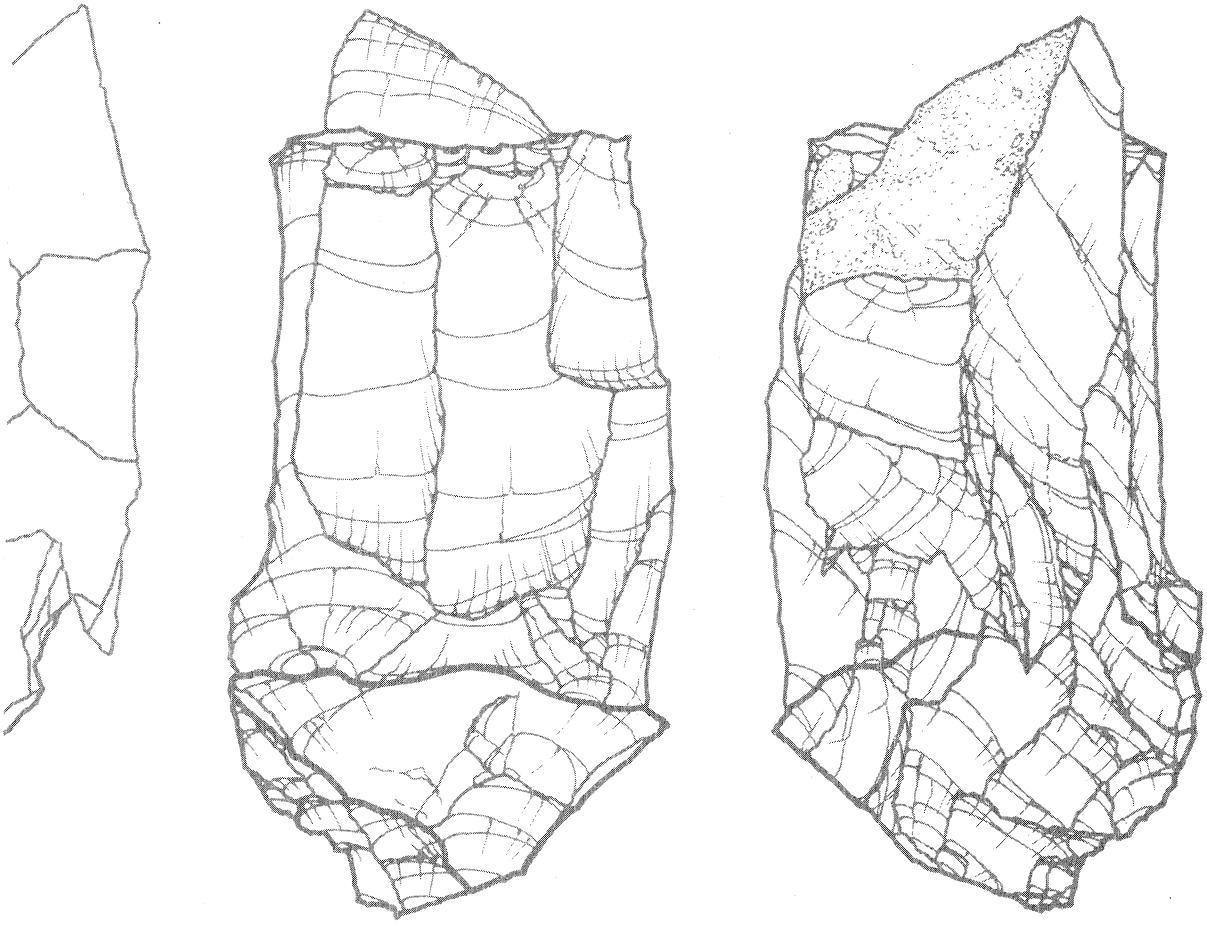
駒方古屋遺跡

発掘調査報告書



別府大学付属博物館

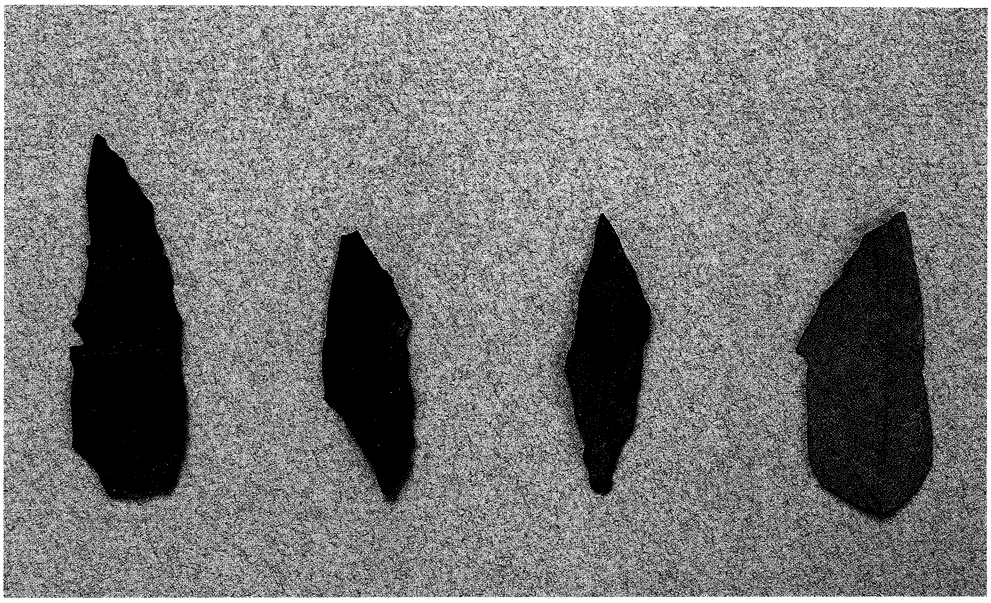
1985

駒方古屋遺跡

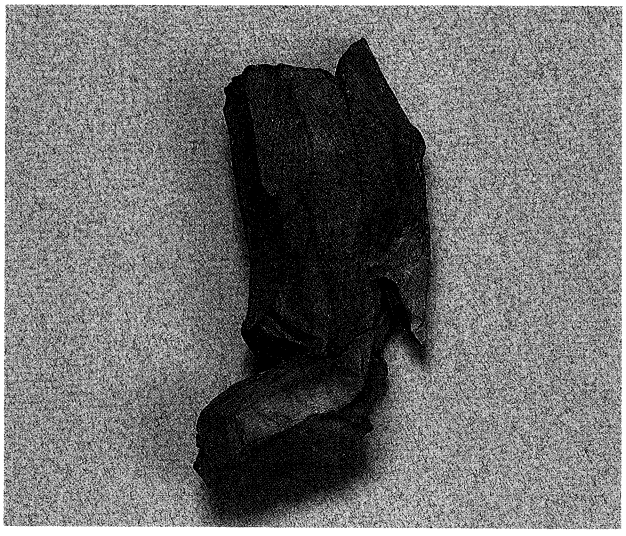
発掘調査報告書

昭和60年

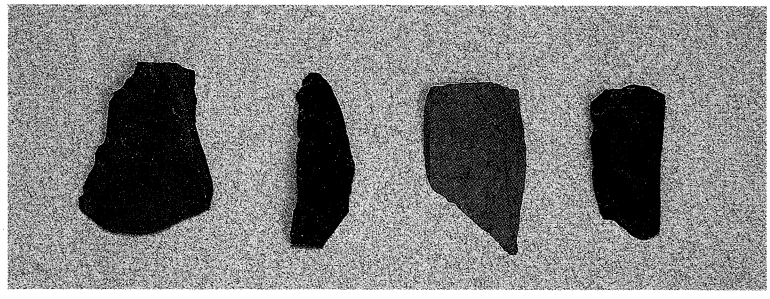
別府大学付属博物館



駒方古屋遺跡出土のナイフ形石器



石核と剝片の接合資料



流紋岩の石質
(左からａ類・ｂ類・ｃ類・ｄ類)

はじめに

阿蘇の外輪山および祖母・傾山系の北麓に源を発する大野川は，大分県のほぼ中央を東流する県下最大の河川である。この大野川の中流域は東九州のなかで旧石器（先土器）時代の遺跡がもっとも集中する地域として注目されている。大野郡清川村の岩戸遺跡，同三重町百枝小学校遺跡，さらに同大野町宮地前遺跡などは，大野川中流域の代表的な遺跡である。これらの遺跡は発掘調査され，多大な成果をおさめているが，この外，試掘調査や表面採集などによる基礎的な調査も続けられている。この結果，当流域に極めて高い密度で旧石器時代の遺跡が密集していることを，具体的な資料で知ることができる。また，大野川流域は旧石器時代研究で重要な手がかりを与える火山起源による火山降下堆積物（テフラ）が発達していることも重視される。

別府大学付属博物館では，「大野川流域における先史時代の調査研究」のテーマに基づいて，当流域の調査を組織的かつ継続的に行うべく努力している。これまでに，大野町今峠遺跡・同町製糸工場前遺跡・同町片島道下遺跡・直入郡荻町上岩戸遺跡などの試掘調査，三重町上下田遺跡の２回にわたる発掘調査，この外，大野町・三重町・清川村などの大野川流域を中心とする分布調査を実施してきた。今回の駒方古屋遺跡の発掘調査もこれまでの大野川流域における先史時代の調査研究の延長線上での１つの実践である。

駒方古屋遺跡の調査の目的は先に述べた通りであるが，特に今回の発掘調査では，当流域における姶良丹沢火山灰（通称ＡＴ）堆積以前の石器群についての究明に焦点を定めて実施した。大野川の中流域でこれまで知られている遺跡の大部分はＡＴ堆積以後，すなわち，今から約21,000年前から１万数千年前までの石器群である。これは東九州の地域に限らず，九州地方の旧石器時代遺跡全般についてもいえることである。

九州におけるこれまでの旧石器時代の調査研究の結果，ＡＴ以後の旧石器文化については，考古学研究での基礎である時間的な流れ（編年的研究）や石器群の地域的な特性（地域的研究）などの輪郭がほぼできつつある。東九州の地域についても同様な状況である。ところが，ＡＴの堆積以前の旧石器文化の研究については良好な遺跡やまとまった石器群に恵まれる機会が少なく，ほとんど手がつけられず，文字どおり今後の大きな研究課題となっているのである。

昭和40年度より大野町の大野原一帯の畑地総合土地改良事業が計画され実施された。その一環として，昭和50年に駒方遺跡が所在する台地の土地改良事業が行われたが，それに先だって大分県文化課による緊急発掘調査が実施された。その調査において，駒方Ａ・Ｂ・Ｃの３地点で，弥生時代から旧石器時代にかけての遺構や遺物が発見された。特に台地の南側よりのＣ地点で，ＡＴ直下の堆積土層と考えられる暗色帯上部から流紋岩を主体とする30点余りの旧石器時代の石器類が発見されたのである。そこで，駒方遺跡Ｃ地点の石器類の出土層位ならびに隣接する地点での文化層の有無を確認すべく，今回の発掘調査を別府大学付属博物館で実施したのである。

調査の要約

1　駒方古屋遺跡は大分県大野郡大野町大字中原字古屋に所在する旧石器時代の遺跡である。

2　当遺跡の発掘調査は別府大学付属博物館が「大野川流域における先史時代の調査研究」をテーマとして継続的に行っている調査研究活動の１つとして昭和58年８月17日から８月30日までの14日間実施したものである。

3　遺跡は大野町の南半分に広がる標高200～300mの「大野原」あるいは「大野原台地」と呼ばれている台地上に立地しており，その標高は約238mである。

4　今回調査を実施した駒方古屋遺跡の調査地点（第１次地点）は，昭和49年から50年にかけて，大分県文化課が緊急発掘調査を実施した駒方遺跡Ｃ地点第Ⅳ区に隣接しており，両地点の距離は20～25mである。

5　調査区は５×５mのメインとなるＡ調査区と，それに石器群の広がりおよび土層観察のための２×２mのa^1～a^5・６・７調査区７つを発掘した。発掘総面積は53m²である。

6　出土遺物の石器類の総数は258点であり，すべて旧石器時代の所産と考えられるものである。石器の種類ではナイフ形石器をはじめとしてグレイバー・スクレイパー・二次加工剝片・使用痕剝片などがあるが，その総数はわずか24点で，外は大部分が剝片・砕片である。

ナイフ形石器は縦長剝片を素材にした二側縁加工・一側縁加工それに部分加工の３つの形態がみられる。また，石核・剝片・ナイフ形石器などに，上下両端からの縦長剝片剝離技術が明瞭に認められる。

7　石器類は約５×3.5mのやや集中する地点を含む約10×５mの範囲から出土しており，１つのブロック（ユニット）として把握できる。当ブロックの平面的な分布およびその位置から県文化課調査のＣ地点のブロックとは別なブロックである。

8　石器類の出土層位は暗色帯への漸移層と判断した暗褐色土層（Ⅳａ層），ＡＴが風化土壌化した土層と考えられる黄褐色土層（Ⅲ層）および暗色帯である黒褐色土層（Ⅳｂ層）である。石器類の数はⅣａ層が最も多く，次いでⅢ層，Ⅳｂ層の順となっている。

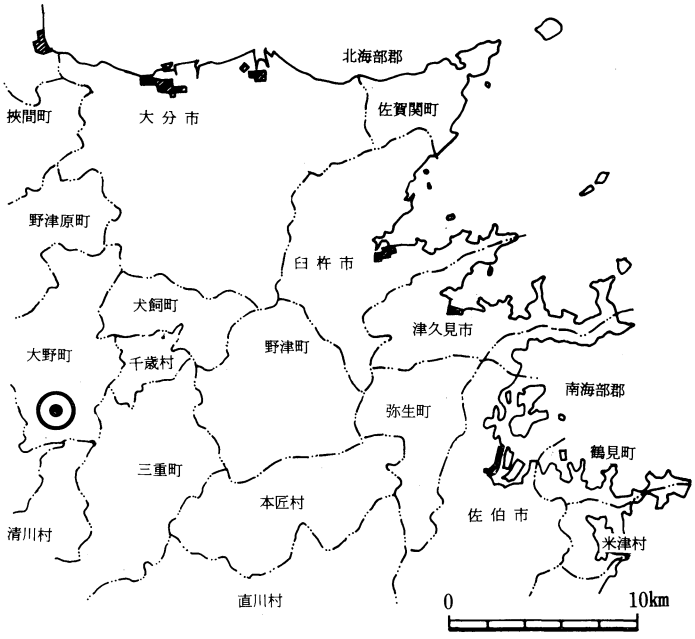
9　石器類は異なる３つの土層中から出土しているが，接合資料および石質別資料の垂直分布ならびに平面分布の分析・検討から１つの文化層として把握される。

10　石器類の石材は，１点のチャートをのぞくと，すべて無斑晶流紋岩で占められている。しかし，この無斑晶流紋岩は表面の色調・模様などに違いが観察され，４大別できそうである。

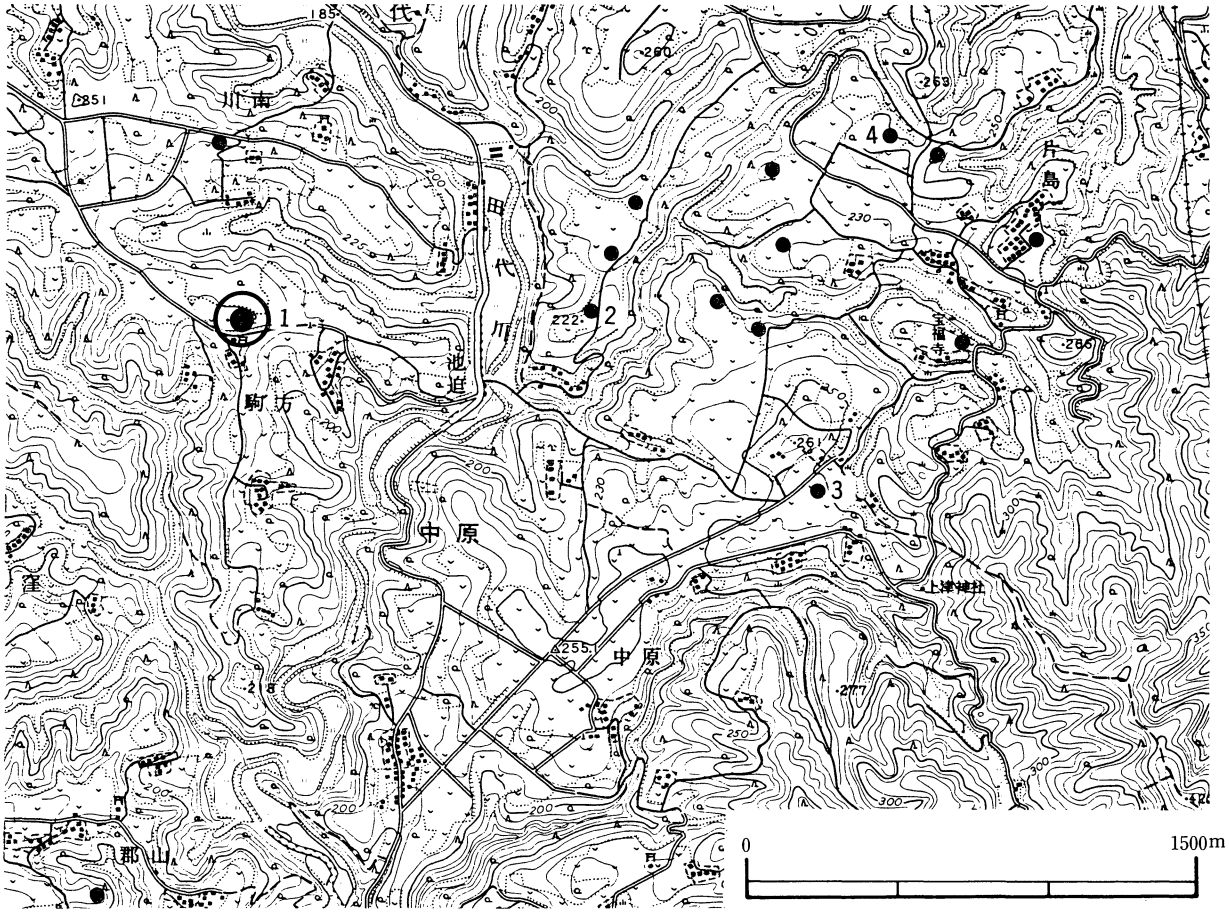
11　駒方古屋遺跡出土の石器群は，ＡＴの降下堆積直前（約23,000年前）の時期が考えられ，駒方Ｃ地点出土の石器群と同時あるいは極めて接近した時期の所産であろう。

12　東九州におけるＡＴ下位の石器群について様相の一端を把握することができた。

遺　跡



第１図　駒方遺跡の位置図



第２図　駒方遺跡周辺の地形と主要な旧石器時代遺跡
（１駒方古屋遺跡　２松ノ木遺跡　３宮地前遺跡　４片島道下遺跡）

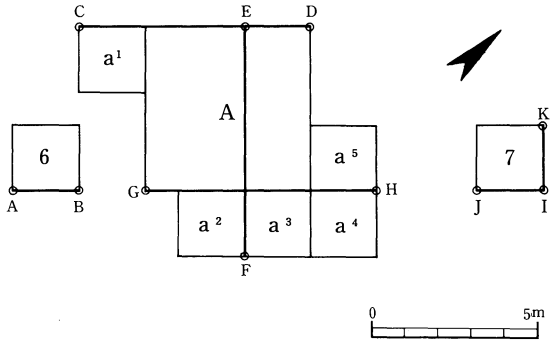
遺跡の環境

大野川中流域の北側に位置する大野町は，その南半分に標高200～300mの凝灰岩台地が開けており，一般に「大野原」あるいは「大野原台地」と呼ばれている。台地は南北・東西ともに幅が約6kmであり，阿蘇山の噴火活動に伴う火砕流（Aso-4）の堆積によって形成されたものである。この台地は，大野川をはじめとする多くの河川の浸蝕によって，多数の独立した舌状台地ができあがり，複雑な地形を呈している。これらの台地は茜川水系の北東部と平井川水系の南西部とに大きく分けることができる。

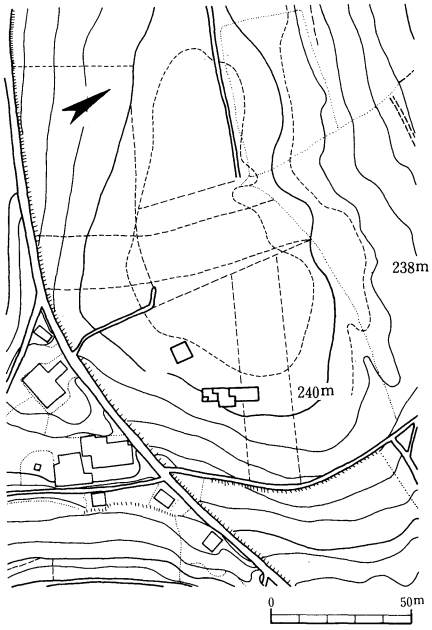
大野原台地の南西部は平井川の支流である田代川がほぼ南北に貫流しており，その西側に平行して広がる複雑な形の舌状台地のほぼ中央に駒方古屋遺跡が立地している。その標高は約238mである。遺跡のあるこの舌状台地は昭和40年度より開始された大野原一帯の畑地総合土地改良事業の一環に組み込まれ，昭和50年に工事が実施された。この工事によって遺跡に隣接する台地の中央部が1m前後削平され，それらの土は台地周辺に客土としてならされている。そのため工事後の台地は平坦になっている。

第4図は駒方古屋遺跡のある台地の工事以前の地形図である。ほぼ南北に延びる独立丘稜状の台地であったことがよくわかる。また昭和49年から50年にかけて県文化課が調査を行なった駒方C地点および今回の駒方古屋遺跡（第1地点）ともに，台地の東南部にあたり，しかも中央部から緩斜面にかけての中間に占地していることを知ることができる。いっぽう第5図は工事後，すなわち現在の駒方遺跡周辺の地形である。駒方古屋遺跡が所在する「大野原台地」では，これまでの発掘調査・試掘調査ならびに分布調査の結果，50個所を超える旧石器時代の遺跡が確認されている。大野川中流域のみならず東九州地域において，旧石器時代遺跡がもっとも集中している地域として注目される。旧石器時代の遺跡は標高200～300mの大野原台地のほぼ全域に認められるが，特に田代川を挟んで，その東西の両台地に集中する傾向がうかがえる。以下，駒方古屋遺跡の周辺に所在する旧石器時代遺跡について簡単に触れてみる。（第2図）

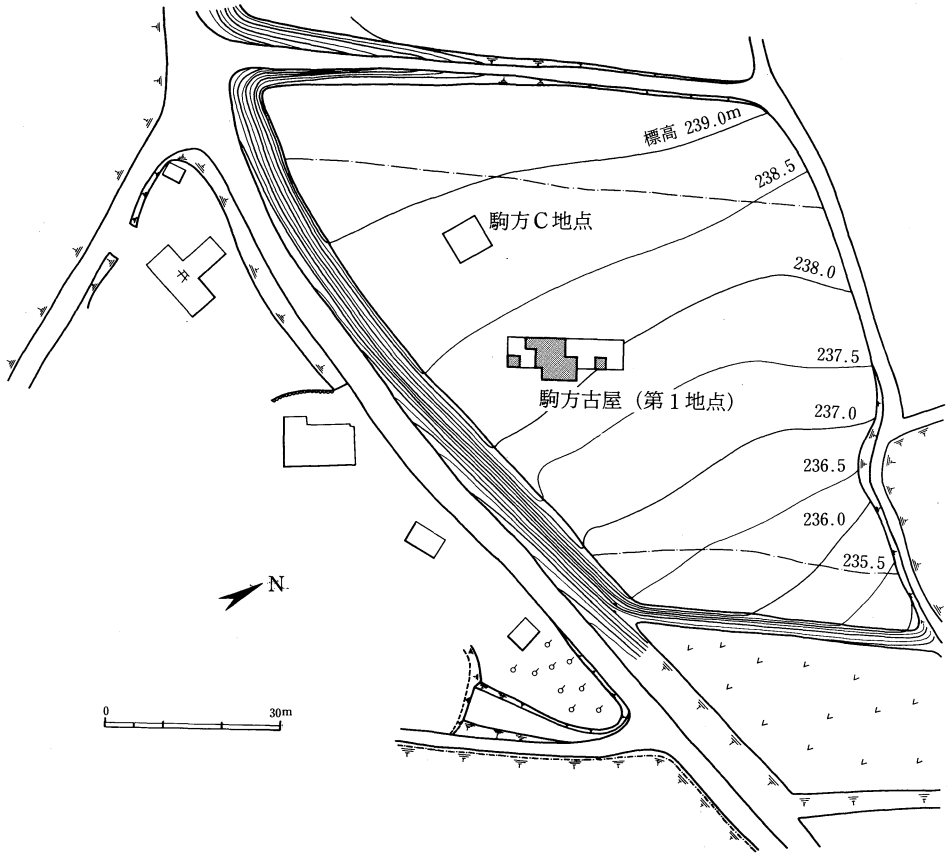
駒方古屋遺跡の東約1.2kmに田代川を挟んで**松ノ木遺跡**が対峙している。昭和53年の緊急調査でローム層中からナイフ形石器・三稜尖頭器・石刃石核・縦長剝片などが発見されている。特に石刃石核は駒方古屋出土の石核と比較検討する上での好資料である。東南東約2kmには，昭和48年平安博物館によって発掘調査が実施された**宮地前遺跡**がある。縄文晩期の文化層下位の黄褐色ローム層から数は少ないが，細石核・スクレイパー・剝片などが出土している。旧石器時代終末の細石器文化の代表的な遺跡である。東北東約2.2kmの大野原台地のほぼ中央の片島地区には限られた狭い地域に5・6個所の旧石器時代遺跡が集中しており，その1個所が**片島道下遺跡**である。当遺跡から多くのナイフ形石器が出土しており，その文化層はソフトローム層の下部からハードローム層の上部にかけてと考えられる。北東約2kmには，黒曜石製のナイフ形石器が出土した大塚遺跡が所在している。また，その遺跡に隣接して，小形で幾何形をしたナイフ形石器や台形石器などが発見されている今峠遺跡がある。



第3図　調査区と土層観察地点

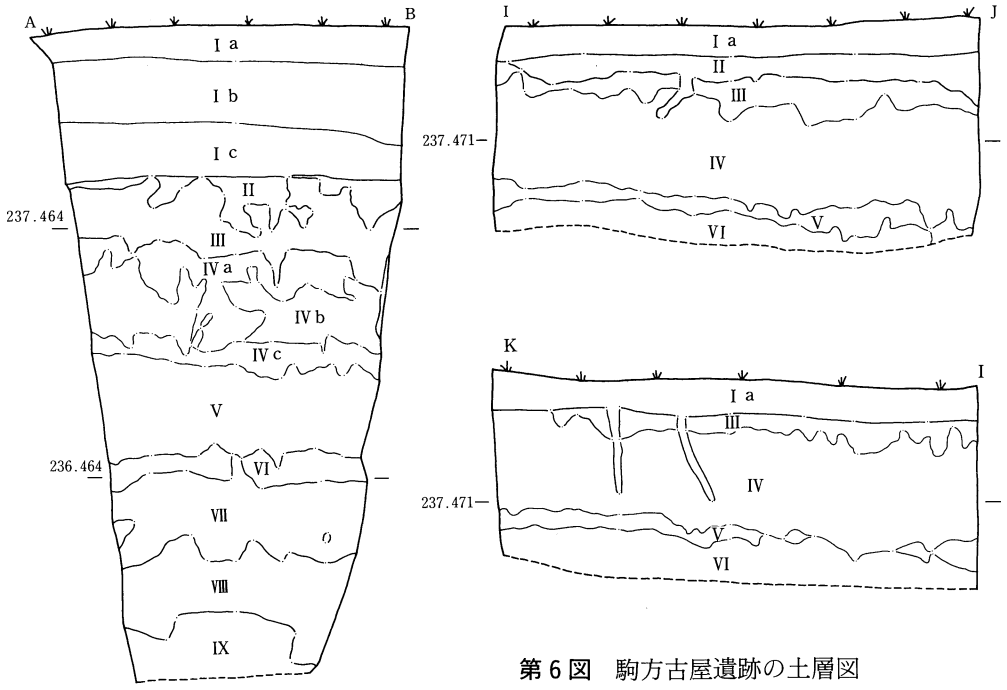


第4図　土地改良事業以前の遺跡周辺の地形



第5図　遺跡周辺の地形と調査地点

基本層序と遺物包含層



第6図　駒方古屋遺跡の土層図

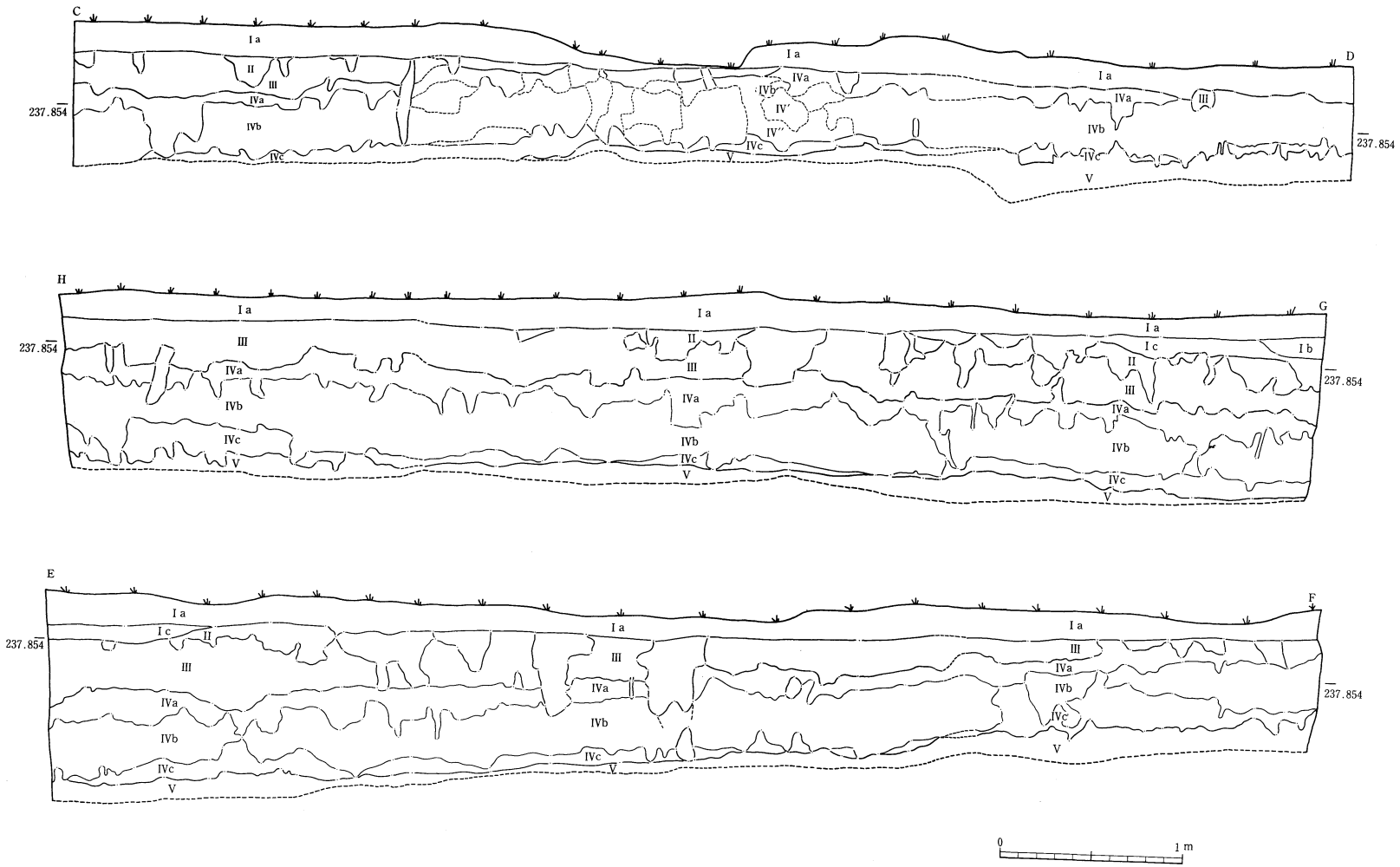
斜面よりの第6調査区の東側断面を本遺跡の基本層序として示した。

Ⅰ層　いわゆる客土であり，厚さは約60cmである。土質および土色から3つに区分できる。Ⅰa層は，灰褐色土層で現在の耕作土である。2～3cm程の黄褐色の粒子が混入しており，軟質である。ローリングを受けた土器の小片が含まれている。Ⅰb層は，整備事業の際に運ばれてきた客土であり，硬くしまっている黒色土の中に，黄色土がブロック状に点在している。Aグリットの東側断面の南端に一部認められるが，外には認められない。Ⅰc層は，Ⅰb層と同様に整備事業の際に運ばれてきたものと考えられる。黒味が強く軟質である。1～2cm程の黄褐色の粒子が混入している。土質・土色では，クロボク層と比定できるものと考えられるが，遺物は認められない。Ⅱ層とは不整合関係にあり，境界は明確である。

Ⅱ層　暗茶褐色を呈する土層であり，上部は削平されている。Ⅰc層とⅢ層が混在しており，硬くしまっている。地点によって，黒味の強弱が見られる。

Ⅲ層　黄褐色をしたローム層で，遺物包含層である。色調・土質などから，ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が風化土壌化した土層と考えられる。地点によっては，黄・赤味のパミスが混入している。また，比較的軟質で黄味の強いブロック状のものが点在しているが，全体的に粒子は細かい。

Ⅳ層　大野川中流域で一般的に「暗色帯」あるいは「黒色帯」と呼ばれている土層で，Ⅳbの黒褐色土層を狭んで，上下にⅣa・Ⅳcの漸移層が存在する。厚さは40～50cmである。Ⅳa層は暗



第７図　駒方古屋遺跡の土層図

褐色を呈し，IVb層への漸移層である。遺物包含層中，この層で遺物数がピークをむかえる。茶色がかった層中にＡＴと考えられる白黄色を呈する４～５cmほどのブロックが混入している。全体的に粒子は細かい。III層・IVb層との境界は明確ではない。IVb層は「暗色帯」・「黒色帯」と呼ばれている層である。遺物はこの層の上部まで少数認められる。厚さは一定していない。粒子は細かい。IVc層との境界は明確ではない。IVc層は褐色土層で，Ｖ層への漸移層である。IVa層と比べると白っぽく，またＶ層に比べると粒子が荒く全体的に硬くしまっている。

Ｖ層　明黄褐色土層で，粒子が細かくやや粘性がある。下部には，IV層に見られるパミスが混入している。上部は白っぽいが下部は黒っぽくなる。VI層との境界は明確ではない。

VI層　明黄褐色土層で，Ｖ層に比べると硬くしまっている。色調はＶ層と同一であるが，１～３mm程のパミスがブロック状に多く点在している点で異なっている。

VII層　暗茶褐色粘質土層で，黄色土に黒色の土が混入したような状態である。粒子が細かく粘性が強い。上部にはVI層に見られるパミスが少し見られる。中部・下部ではVI層のものとは異なるオレンジ色のパミスがブロック状に混入している。

VIII層　褐色を呈するが，やや茶色味がある。VII層に比べ硬質で，４～５mm程の赤いパミスが混入している。IX層中に存在する２～３cm程の風化礫？が見られる。

IX層　黄白色土層で，九重第１パミス（Kjp 1）の層である。粒子が比較的大きく，白色・黄色味が強い。

石器群の遺存状況

今回の駒方古屋遺跡の発掘調査において，258点の石器類が出土しており，そのうち199点はメインの調査区である５×５ｍのＡ調査区からの出土である。層位的には暗色帯への漸移層である暗褐色土層（IVa層）122点，ＡＴの風化土壌化した土層と考えられる黄褐色土層（III層）から89点，さらに暗色帯である黒褐色土層（IVｂ層）から31点それぞれ出土している。外にII層から13点，IVc層から３点，表採で６点である。

このように各土層から石器類が出土しており，文化層は50cm前後の厚さを有している。これらが一つの文化層として把握されるか，あるいは複数の文化層が重なりあっているか，ということが当遺跡出土の石器群を把える時の基本的な問題となる。この点については，20点８組の石器類の接合資料および石質別資料の整理とその分析，さらに第８図の石器群の５cmごとの垂直分布図の作成などから，１つの文化層として考えている。

次に，これらの石器群の平面的な広がりは，長軸を東西の方向にとる約10ｍ×約５ｍの範囲で長楕円形状にみられ，１つのブロック（ユニット）を形成している。このブロックのほぼ中央の約５ｍ×約3.5mに石器群がやや集中する傾向がうかがえる。このブロックから南西に約３ｍ離れた６グリッドや逆の位置に約４ｍ離れた７グリッドでの石器の出土は皆無に近い状況である。

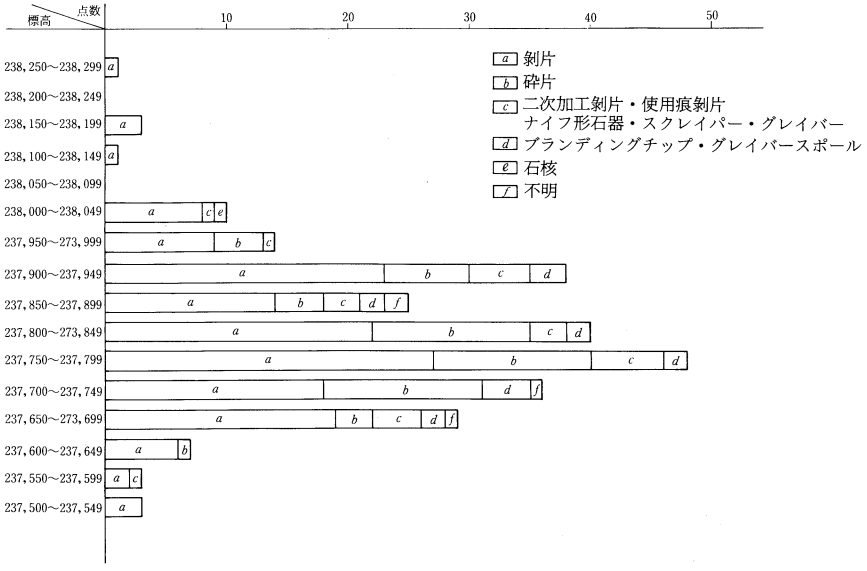
すなわち，７グリッドの第III層で剝片が１点出土したのみである。

器種別の分布については，当遺跡出土の石器類の大半が剥片と砕片で占められ，石器が極端に少ないためか，ブロック内で同一器種の集中部は認められない。ただ，当遺跡の石器類で顕著なブランティングチップがナイフ形石器の周辺に出土し，しかもそれらの中には，ナイフ形石器と同じ石質が存在することから，ブランティングチップはそれぞれのナイフ形石器製作に伴うものである可能性が示唆されている。礫核石器や礫はまったくみられなかった。

いっぽう，石質別の平面および垂直分布では，ブロックのほぼ中央に明黄灰色で全体的に白っぽい流紋岩（C類）と茶褐色で光沢をもつ流紋岩（d類）が１つのまとまりをもって存在する。この両者の流紋岩は，垂直分布では包含層の上部にはc類が，そして下部ではd類が多いという傾向がみられる。

層	器種／調査区	ナイフ形石器	グレイバー	スクレイパー	ブランティングチップ	グレイバースポール	石核	使用痕剥片	二次加工剥片	剥片	砕片	ブランク	不明
II	A		1			1				2	1		
	a^1												
	a^2	1								2			
	a^3												
	a^4									3			
	a^5				1					1			
	7												
III	A	2			2	1		1	2	33	13		1
	a^1												
	a^2									2			
	a^3	1								7	4		
	a^4	1	1					1		2			
	a^5				2			1		9	2		
	7									1			
IVa	A	6			5	1	1	2		60	28		2
	a^1							1		1			
	a^2												
	a^3									2			
	a^4									1			
	a^5	1				1				9	1		
	7												
IVb	A			1	1			1		18	9		1
IVc	A									3			
表採										5		1	
		12	2	1	11	4	1	7	2	161	58	1	4

各層出土の石器類



第８図　石器群垂直分布図

駒方古屋遺跡出土の石器群

駒方古屋遺跡の今回の調査で258点の石器類が出土している。これらの中で剝片が最も多く156点，次に58点の砕片であり，両者で全体の80％近くを占めている。いっぽう石器ではナイフ形石器が12点，使用痕のある剝片が7点，グレイバーと二次加工のある剝片がそれぞれ2点，スクレイパーが1点である。石器の数が少なく，特に使用痕剝片・二次加工剝片が少ない。またスクレイパーもわずか1点であり，しかも小さな不定形剝片の縁辺にのみ刃部と考えられる調整加工が見られるだけの粗雑なものである。数少ない石器はいずれも剝片石器であり，敲石・磨石，あるいは礫器などの礫核石器や礫塊石器などは皆無である。

剝片・砕片や石器の外では，ブランティングチップ11点の出土が特記すべきものであろう。この石器類はナイフ形石器の製作過程，特に調整加工(刃潰し加工)の際に作出されるものである。最大長が5㎜にもみたない小さなものや，10㎜前後の大きなものがある。ブランティングチップはナイフ形石器の周辺から出土する傾向がみられる。外には，彫刻刀（彫器）の製作に関連するものとして，グレイバースポール（削片）が4点，縦長剝片の石核が1点出土している。

石材は1点のチャートをのぞいて，外はすべて流紋岩である。ただ，流紋岩も表面の色調や模様などから4つに分類できそうである。

以上のような石器群は，その出土状況および石器群の特徴から単一の石器群と考えられる。

ナイフ形石器

189＋130・25・118の3点は，一側縁加工のナイフ形石器である。

189＋130　縦長剝片を素材としており，先端部から左側縁のほぼ中央部までを刃部としている。素材の原形をほとんど残しており，打面も残存している。130の接合面のリングの方向から，189は加工の際に欠けた可能性が考えられる。

25　小形の剝片を素材とした厚手のナイフ形石器で，左側縁上部を刃部としている。加工は，主に背面側から施されている。ブランティング加工を施す前に素材を大きく変形させており，主要剝離面には3枚の剝離面が見られ，背面にも，下端部に打面部をカットするように調整剝離が施されている。

118　階段状剝離による薄手の剝片を素材としている。素材の打面側を斜めに折断し，その折断面に加工を施している。素材の一端に鋭く突出している縁辺部を刃部としている。

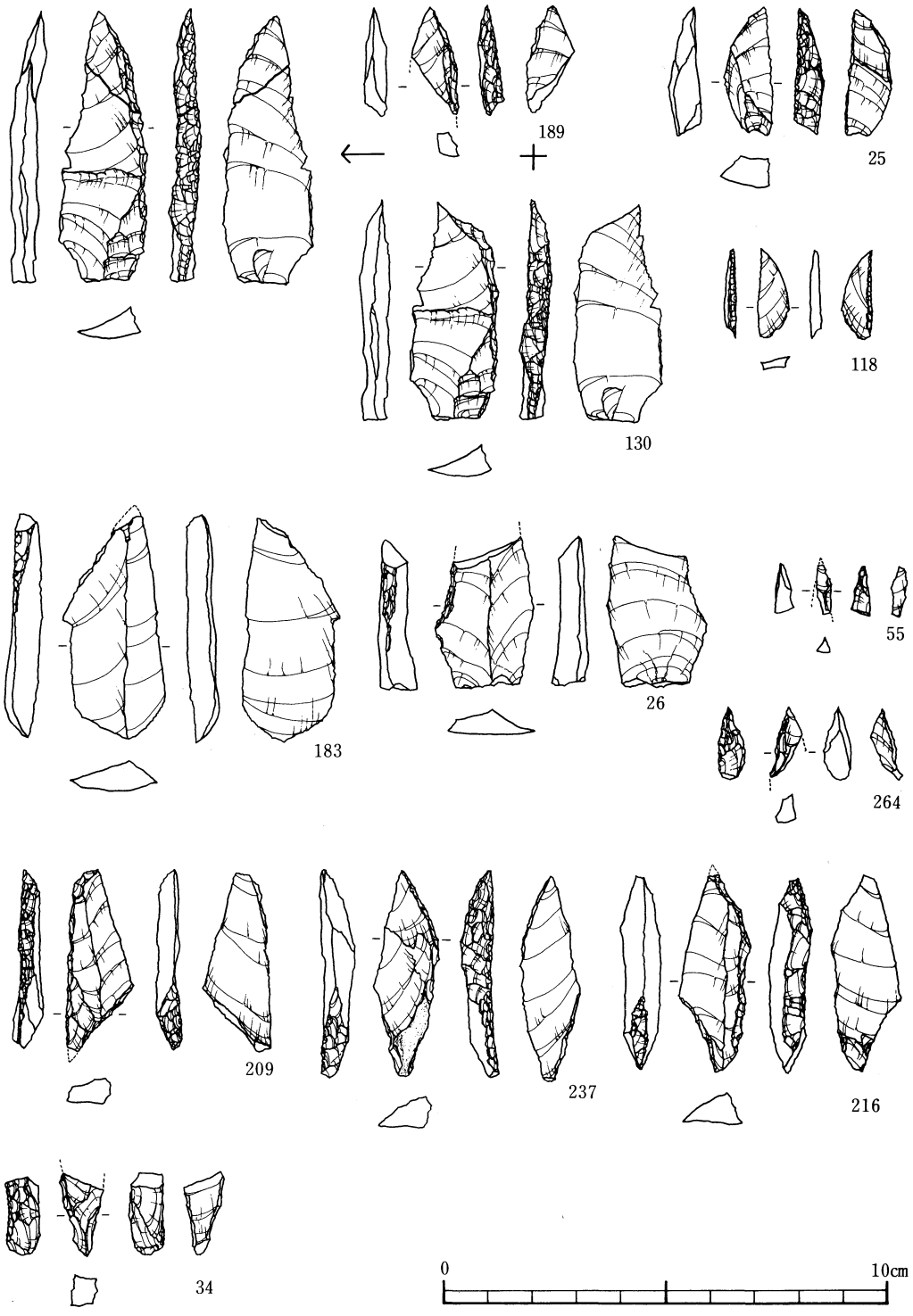
183・26は，縦長剝片を素材とし，部分加工を施したナイフ形石器である。26は先端部が欠損しているが，石材・形態などは類似している。

183　素材の上端部から左側縁へ打面部をカットするように加工を施している。

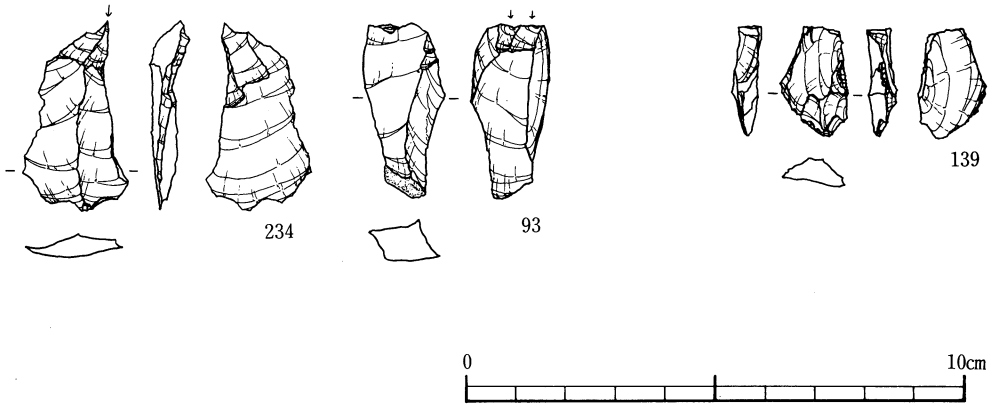
26　打面部を残し，左側縁部に加工を施している。先端部は欠損している。

55・264　先端部のみで大部分が欠損している。264には背面側からの加工が若干施されている。

209・237・216・34は，二側縁加工のナイフ形石器である。すべて，素材の末端を基部側とし



第9図　ナイフ形石器



第10図　グレイバー・スクレイパー

ている。また，細味で，上・下両端が尖っており，背部と反対側の基部は，やや内側に湾曲している。

209　右側縁を刃部としている。背面に上・下両方向からの剝離面が見られることから，素材は両設打面の石核から剝取されたと考えられる。基部が一部欠損している。

237　左側縁を刃部としている。右側縁の先端部に限っては，背面側から加工が施されている。基部に自然面を残している。

216　左側縁を刃部としている。基部に裏面加工を施している。209と同じように，素材は両設打面の石核より剝取されたものと考えられる。

34　大部分が欠損しており，基部のみが残存している。加工は，両側縁とも，背面側からも一部施されている。

彫　　器（グレイバー）

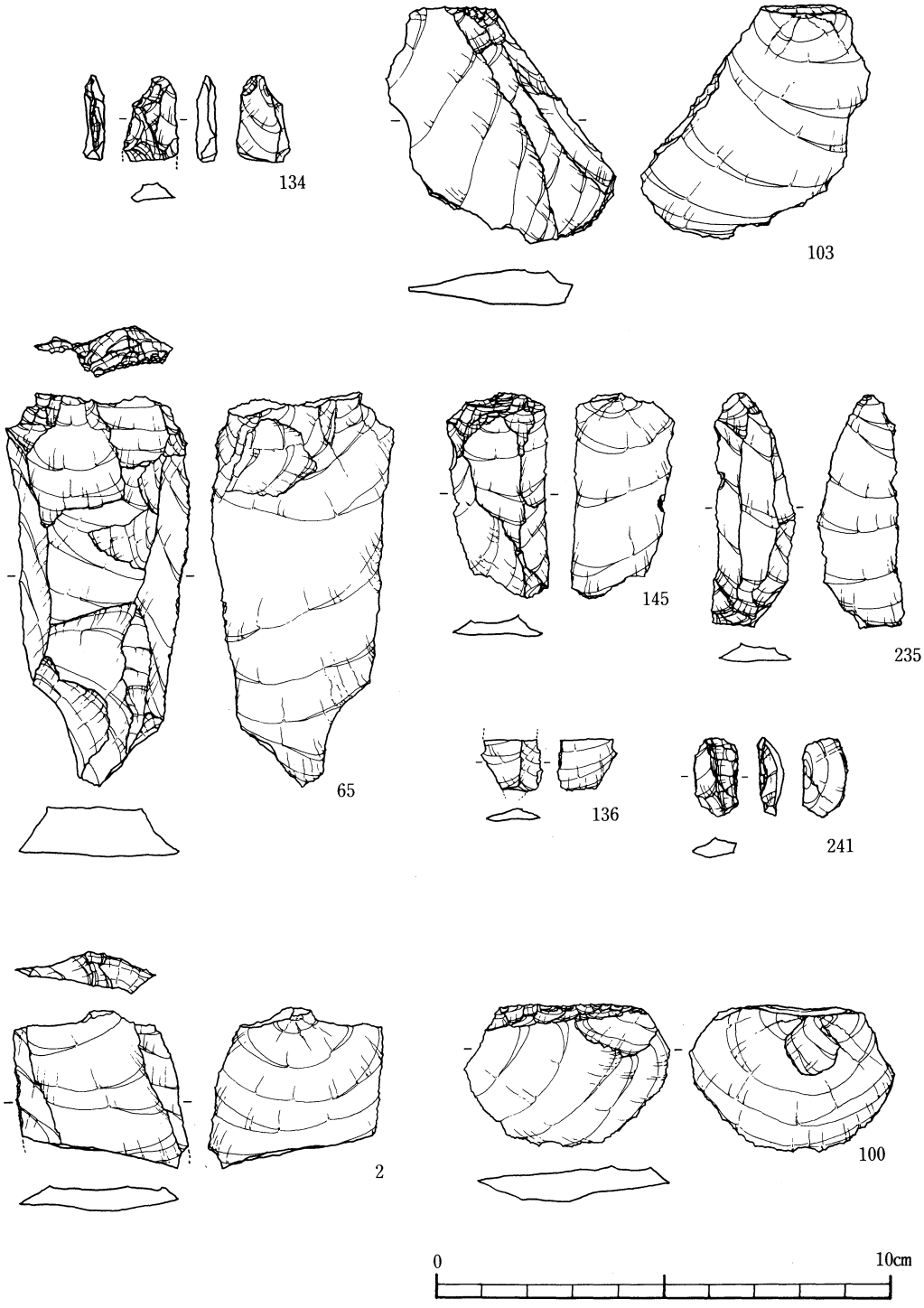
234　縦長の剝片を素材とし，打面部の右上部から左斜め方向，および右側縁部を断つように下方向への数回の剝離作業により彫刀面を作出している。彫刀面には打点が見られないが，おそらく欠損のためと考えられる。

93　末端部に自然面を持つ縦長の剝片を素材としている。彫刀面は，背面の上部を打面とし，主要剝離面側への2回の剝離作業により作出している。

掻　　器（スクレイパー）

139　小形で横長の剝片を素材としており，素材の右側縁部に沿って微細な二次加工を行なっている。器種認定については，素材が小さいことや，二次加工が微細であることから，使用痕剝片としても考えてみた。しかし，刃部とした部分に見られる連続した剝離面は，やはり，二次加工によるものと考えられることから，ここではスクレイパーとして扱った。

第11図　ブランティングチップ・グレイバースポール



第12図　使用痕剝片（U—Flake）・二次加工剝片

ブランティングチップ

これらは，ナイフ形石器の製作過程で，ブランティング加工の際に生じた砕片と考えられるものであり，寺谷遺跡・柿崎遺跡などにおいて報告されている。当遺跡においてもブランティングチップと考えられるものが11点出土している。認定に際しては，次のような基準で行った。

① 長さ，幅ともに1cmの枠を出ない。

② 主要剥離面にポジティブバルブを持つ。

③ 正面に旧ブランティング加工面を持つ。

④ 打点から急斜度な旧ブランティング加工面に隔てられた面か，打点の反対側の縦断面に素材剥片の背面，あるいは主要剥離面を残す。

⑤ 打点を頂点としてほぼ三角形を呈する。

グレイバースポール

当遺跡では4点出土しており，いずれも平担な打面を持つ。また，上端部あるいは下端部に微細な剥離面が見られる。これらの剥離面には，打点が見られないことから，各スポールの剥取以前に施されたものと考えられるが，グレイバー製作に伴う素材への二次的な加工かどうかは断定できない。

106・259　下部が欠損しており，それぞれ上端部に剥離面が見られる。

41　上端部及び下端部に剥離面が見られる。主要剥離面に見られる右側の剥離面は素材の旧背面か旧主要剥離面に相当するものと考えられ，また，背面の右側に見られる面が素材の旧側面に相当するものと考えられる。

52　左下端部に左方向からの剥離面が見られる。

二次加工剥片

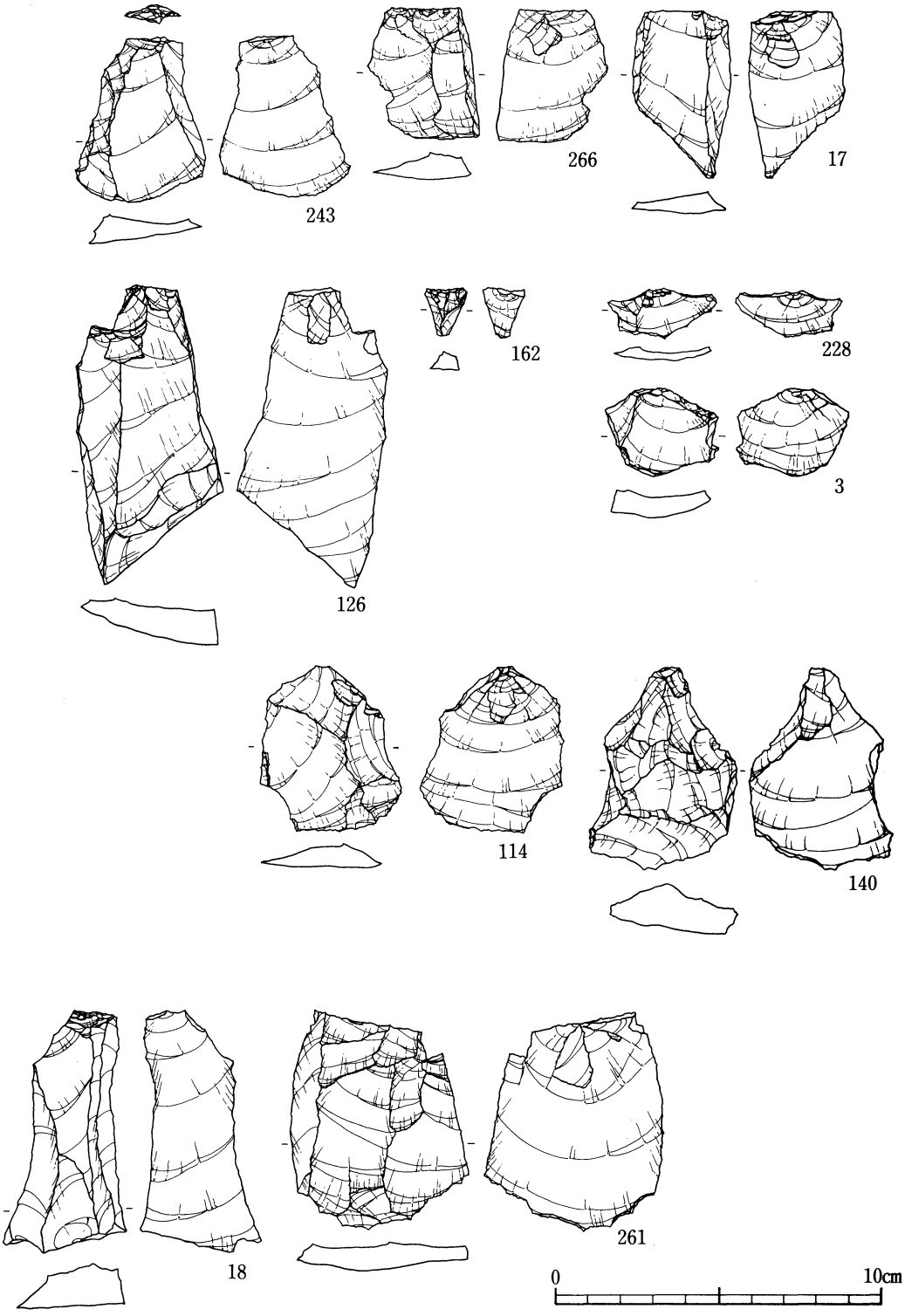
134　打面を持つ小形の不定形剥片を素材とするもので，背面左側縁の一部および主要剥離面左上部に二次加工が認められる。また，背面左側縁には使用痕と考えられる刃こぼれが観察できる。下部が欠損している。

103　平坦打面を持つ縦長の剥片を素材とし，下端部に部分的な二次加工を施している。

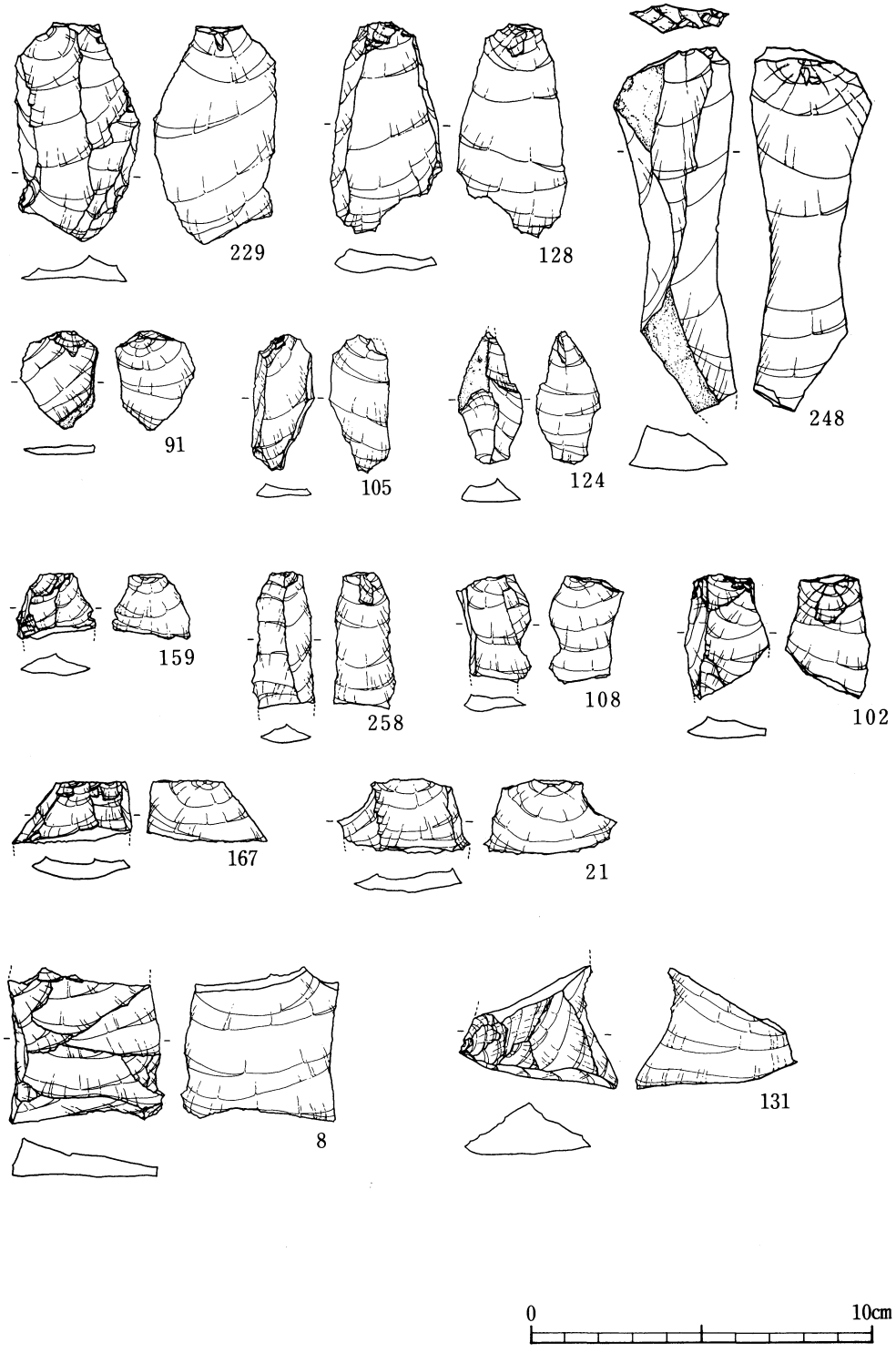
使用痕剥片

65　背面側からの細かい複剥離打面を持つ縦長の剥片で，右側縁に使用痕と考えられる刃こぼれが観察できる。背面に見られる剥離面の剥離方向は，不規則である。また，階段状剥離によるものが多い。比較的厚味があり，板状を呈する。

145　右方向からの単剥離打面を持つ縦長の剥片の下端部および，主要剥離面右側縁の一部に使用痕が見られる。下端部には，下方向からの剥離が施されているが，剥離面調整のためと考



第13図　剝片（フレイク）



第14図　剥片（フレイク）

えられる。頭部調整が顕著である。

235　打面を持つ縦長の剝片で左側縁の一部に使用痕が見られる。

136　上部が欠損しているが，主要剝離面の左側縁に使用痕が見られる。

241　平担打面を持つ小形で横長の剝片で，下端部に使用痕らしい刃こぼれが見られる。

2　左方向および，背面側からの複剝離打面を持つ縦長剝片と考えられるもので，左側縁に使用痕が見られる。下部が欠損している。

100　背面方向からの剝離による単剝離打面を持つ横長の剝片であり，鋭い下縁部に使用痕と考えられる刃こぼれが見られる。頭部調整が顕著である。また，頭部調整部分は，やや摩滅している。

剝　　片

266・105・17・128・229・243・108・126・248は，単設打面の石核より剝取されたと考えられる縦長剝片である。248を除く他の剝片，特に105・17・128・243は，背面のほぼ中央に平担な面があり，その面に隔てられた稜から両側縁にかけて狭い急斜度な面を持つという傾向が認められる。さらに，打面部の欠損している。105を除いては，すべて平担打面を持つ。

266　蝶番剝離によるもので，頭部調整が顕著である。

105　頭部調整が残っていることから，打面部を含む上端部のごく僅かな部分のみ欠損している。また，右側縁には，長軸に対しほぼ90°の方向より斜めの剝取前の3枚の剝離面が認められ，さらに下端部には，下方向からの剝離面が見られる。これらが調整剝離でなければ打面転位，および両設打面の可能性が考えられる。

17　細かい打面調整が施されており，左側縁から下端部にかけて斜めの鋭い縁辺部を持つ。

128　右側縁下部に下方向からの細かい剝離面を持つ。打点が見られないことから両設打面の可能性があるが，当剝片からすると，調整剝離の可能性が強いと考えられる。

229　左側縁の下端部に左方向からの細かい剝離面が見られる。打点が見られないことから128と同じく調整剝離と考えられる。打面調整は，背面側および左方向から施されている。右側縁上部に刃こぼれらしいものが観察できる。

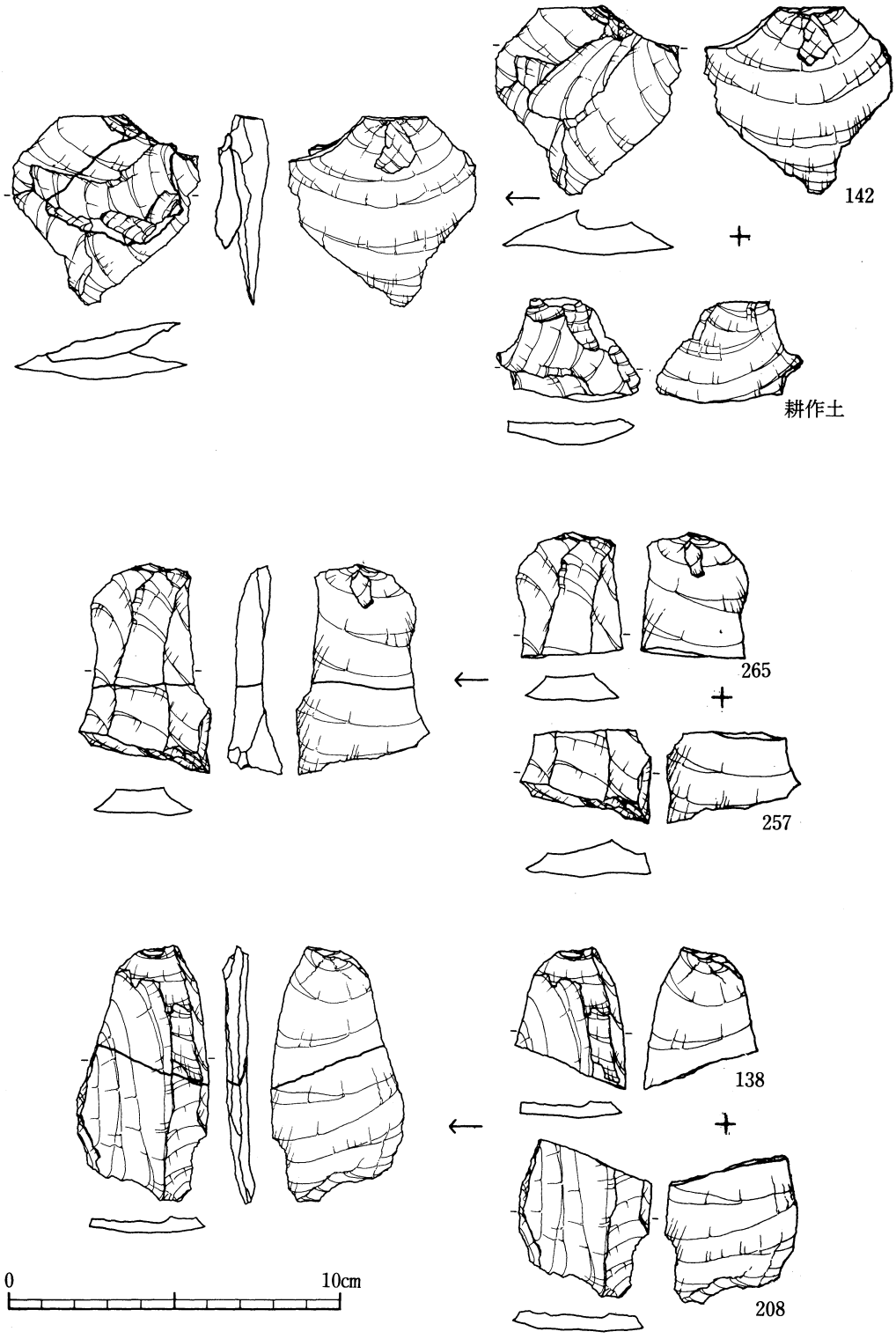
243　左側縁に沿って斜め方向からの剝離面が見られる。打面調整は背面側から細かい調整が施されている。

108　右側縁上部に下方向からの剝離面が中央の剝離に切られて残存している。下端部が欠損している。

126　頭部調整が顕著な厚手の板状を呈するものである。

248　上方向からの比較的大きな2枚の剝離面と左上方向からの剝離面が見られる。また，自然面が上部・下部に残存していることから石核の初期の段階に剝取されたものと考えられる。さらに自然面の位置から原石，および石核の大きさが推察できる。下端部が欠損している。

261・18・258は，両設打面の石核より剝取されたと考えられる剝片である。いずれも上・下



第15図　接合資料

両端より比較的大きな剝離が施されており，平担打面を持つ。

261　右側縁部に平担な自然面を持つ。比較的大きな剝離面で背面を構成している。

18　上部から下部にかけて次第に厚く，幅広になる。また下端部に打点を持つ剝離面が見られることから，当剝片が剝取された石核の長さが推定できる。

258　上･下両方向からの剝離面が1枚ずつ見られる。下部が欠損しているが，細長い石刃状を呈する。

114・140は，背面に周囲からの打撃による剝離面を持つ剝片である。不規則な打面転位を行ったものと考えられる。また，打面を中心に左右へ次第に幅が広くなっている。

114　剝片の大きさに比べ狭い打面を持つ。

140　厚手で，背面は凹凸が激しい。打面部が欠損している。

228　小形で横長の剝片であり，細かい数枚の頭部調整が施されている。

3・91・124は，一部に自然面を持つ小形の剝片である。

3　右方向からの剝離による平担打面を持つ横長の剝片である。蝶番剝離により剝取されたものである。

91　背面方向から2枚の剝離面で打面を形成しており，両剝離面の接する稜上を打点としている。

124　上・下方向からの剝離面が1枚ずつ見られる。打面部が欠損している。

131・8・167・159・102・21は，欠損部が大きく，原形の推察が不可能な剝片である。

131　上部が欠損しており，左方向からの剝離が顕著に施されている。

8　上部が欠損している。背面には，上方向からのみ剝離が施されているが，左側面には，背面方向からの剝離面が見られる。板状を呈している。

167・159・102　背面方向からの剝離による平担打面を持ち，頭部調整が顕著に施されている。下部が欠損しているため，現在の下端部に見られる下方向からの剝離面の性格は推察し難い。159の両側縁には部分的に刃こぼれらしいものが観察できる。

21　腹面方向からの剝離による平担打面を持つ剝片で，下部が欠損している。

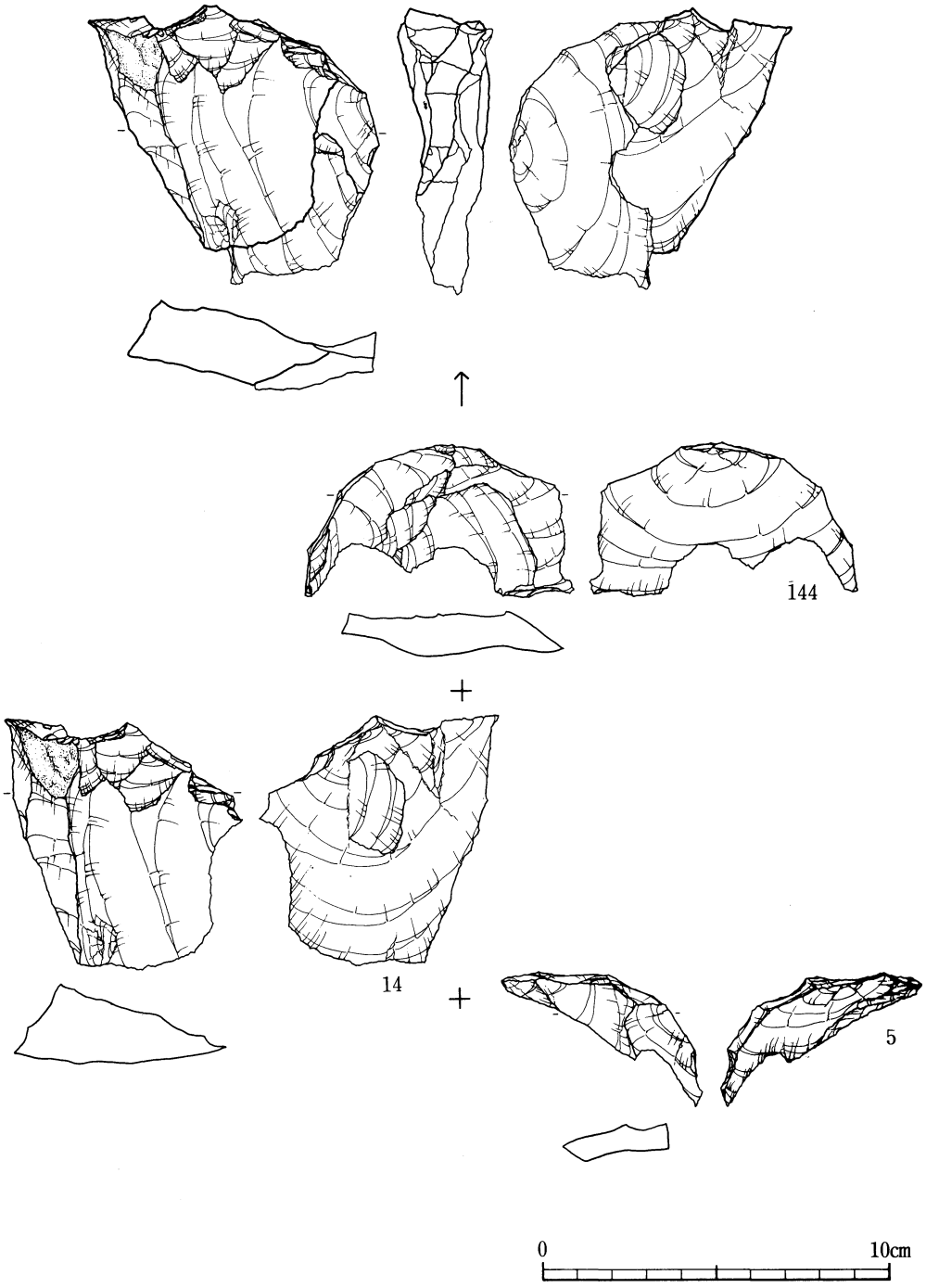
162　平担打面を持つ調整剝片である。

接合資料

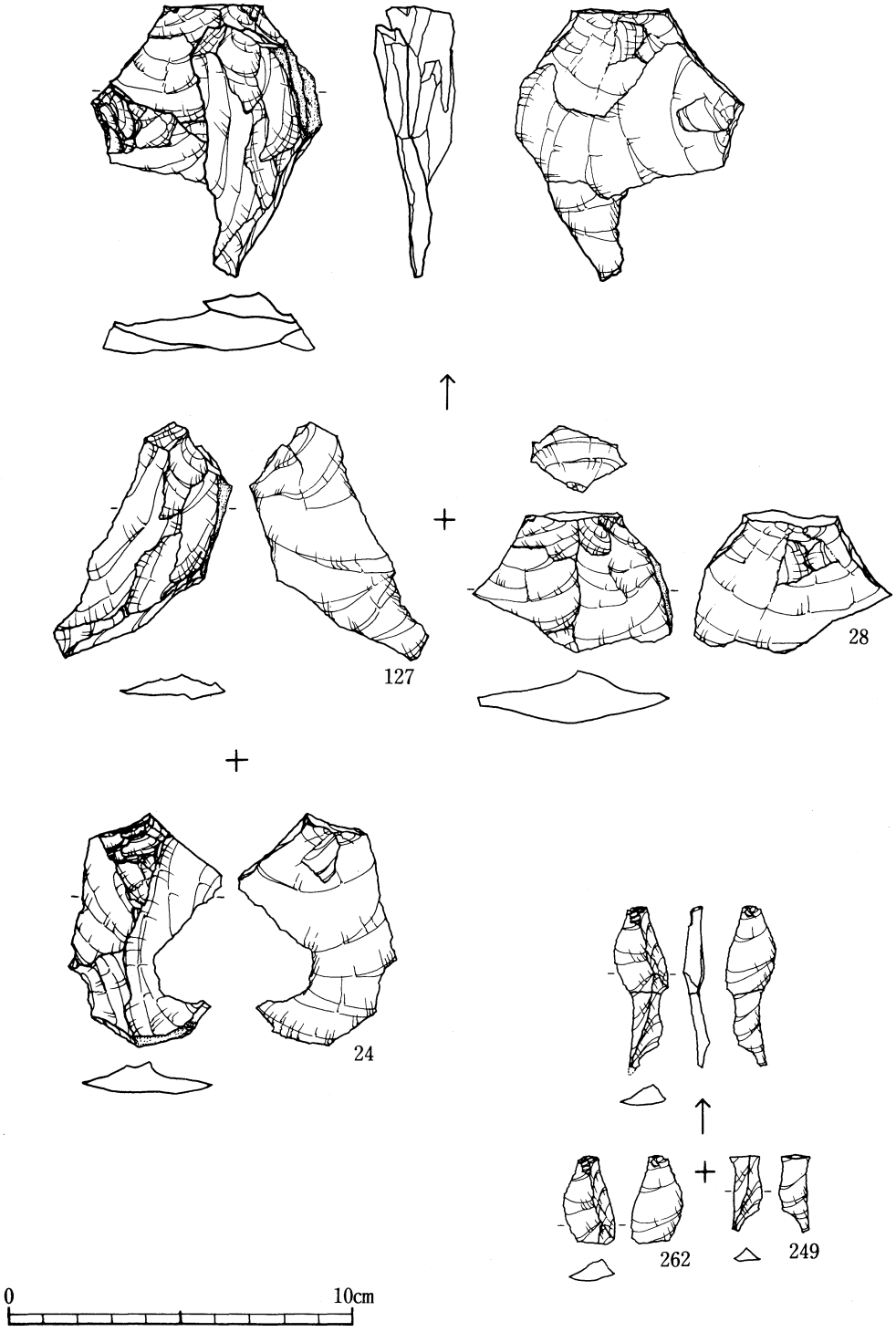
142＋耕作土出土剝片　平担打面を持つ縦長の剝片と耕作土より出土した横長の剝片が接合したものである。不規則な方向からの剝離がなされており，142には右上端部に右上方向からの剝離のためと考えられる頭部調整が準備されている。耕作土より出土した剝片の打面部および右側縁上部は欠損している。

265＋257・138＋208・262＋249は単に折れたため，個々に出土したものである。それぞれ平担打面を持ち，両設打面の石核より剝取されたものと考えられる。

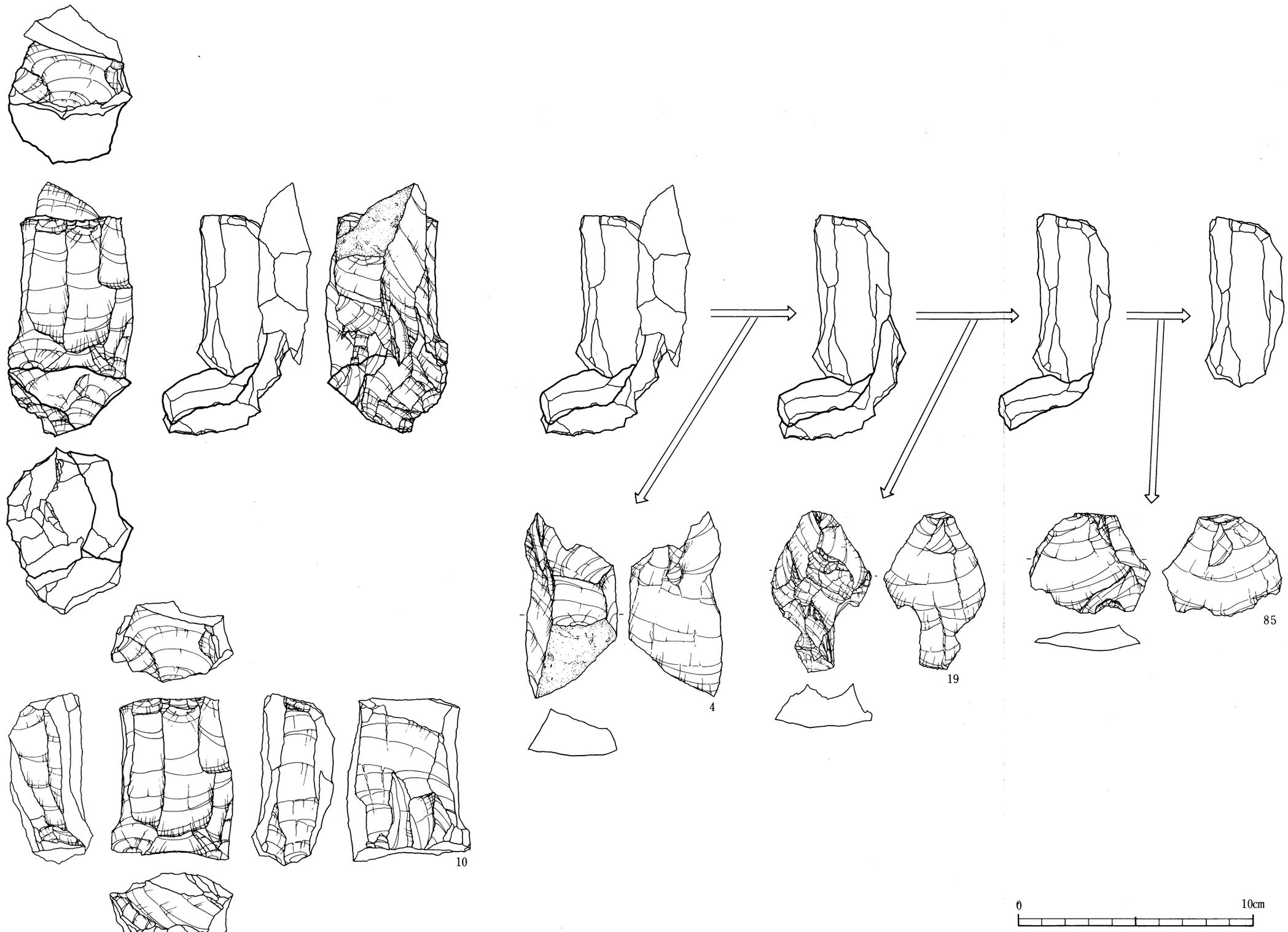
265＋257　下端面は下方向からの剝離のための打面と考えられる。また，下方向からの剝離面には，ネガティブバルブが見られないので，下端面は再生された打面である。



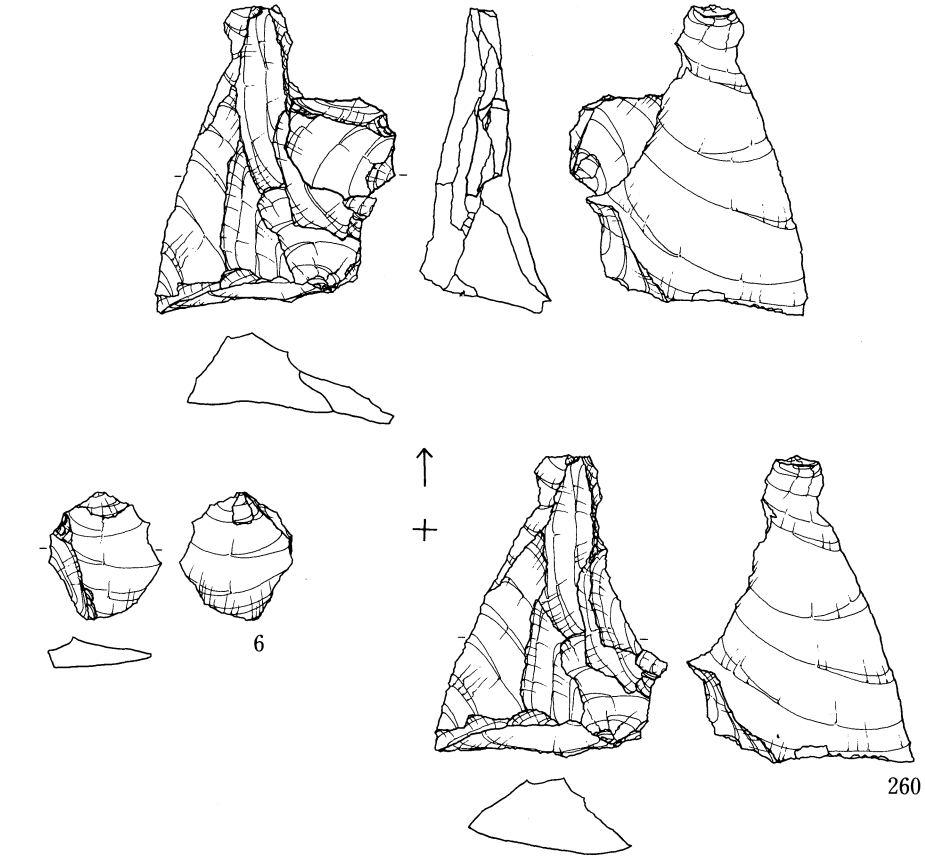
第16図　接合資料



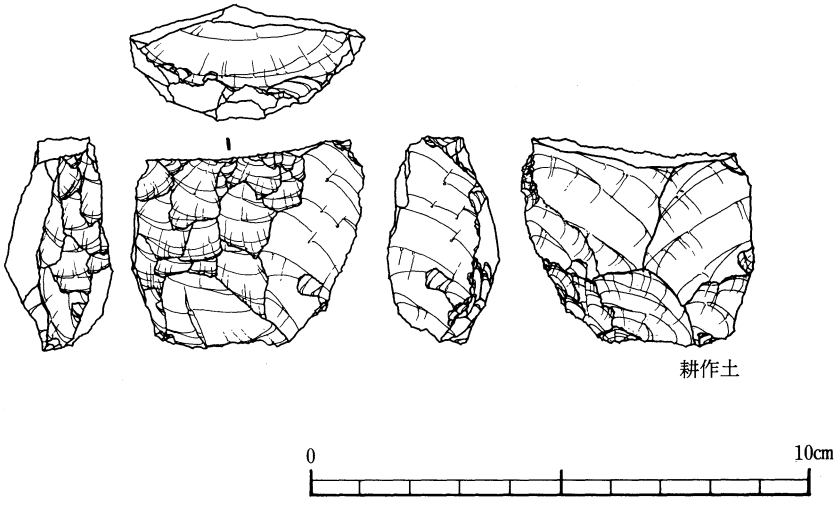
第17図　接合資料



第19図　接合資料（石核と剥片の接合）



第18図　接合資料



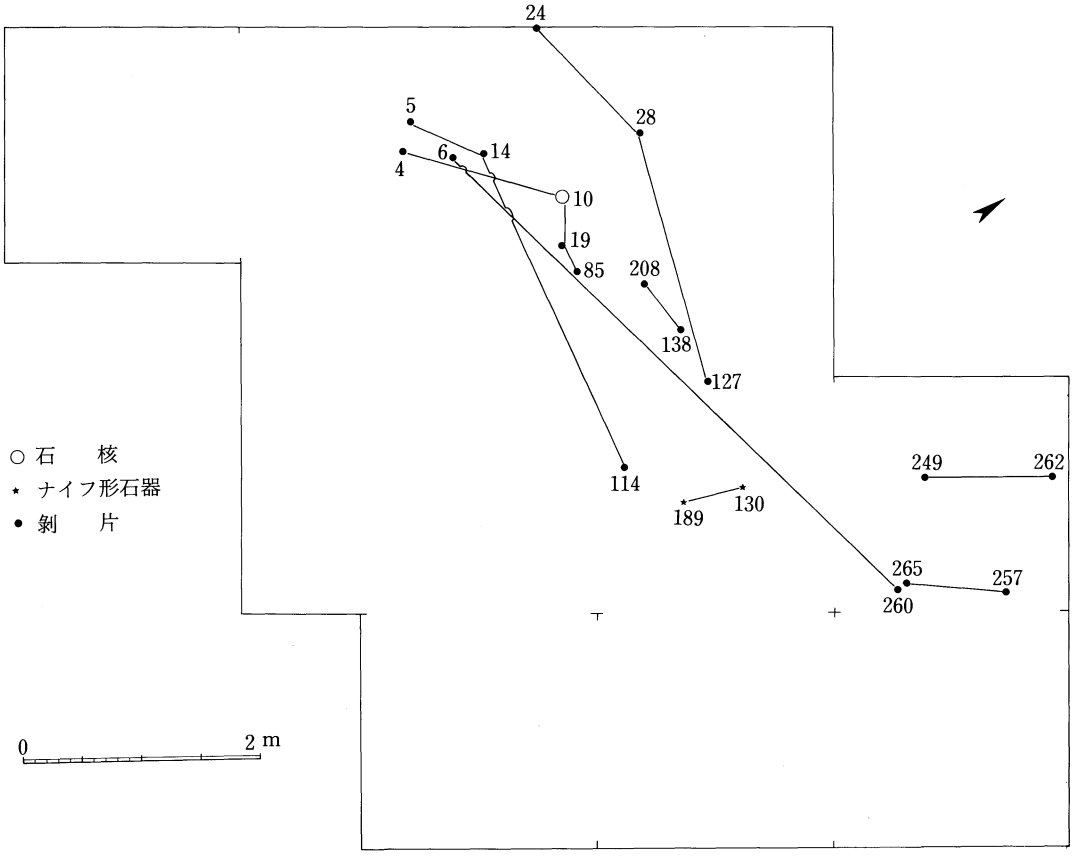
第20図　細石核ブランク

138＋208　薄手の剝片で，左側縁上部に自然面を持つ。

262＋249　小形で細味の剝片である。頭部調整が細かく施されている。

144＋14＋5　接合した剝片はすべて打面再生の過程で剝取された打面再生剝片である。14は複剝離打面を持つ比較的幅広い大形の剝片である。自然面を残していることから，初期の段階に剝取されたと考えられる。その後に5・144が剝取されているが，接合資料から当剝片の剝取された石核の打面の大きさが推察できる。打面部から右側縁上部が旧剝離作業面である。5は横長の不定形剝片である。打面部から右側面に旧剝離作業面が見られる。背面左部分が14に接合する。144は横長の剝片であり，背面右部分を除いて14＋5に接合する。旧剝離作業面は打面部から左側縁下端部まで見られる。

127＋28＋24　打面をほぼ90°ずつ左に回るように転移しながら剝離作業を行っている。127は打面部が欠損している縦長の剝片である。右側縁上部に自然面が見られる。背面には不規則な方向からの剝離面が見られる。24は平担打面を持つ縦長の剝片である。下端部に自然面が見られる。頭部調整が顕著に施されている。28は背面側からの単剝離による打面を持つ。右側縁に自然面が見られる。



第21図　接合資料の平面分布

6＋260　260は打面を持つ縦長の剝片で，不規則な方向からの剝離面が複雑に切り合っている。6は260の右部中央に接合しており，小形の剝片である。

10＋4＋19＋85　両設打面石核に3点の調整剝片が接合したものである。これにより，当石核における素材剝片の剝離作業面の作出，および打面形成という石核製作過程の一端を把握することが可能である。19は接合した3点の中では最初に剝取されたもので，背面側の上端を打面とした厚味のある剝片である。素材剝片の剝離作業面を作出するために剝取された剝片であると考えられる。下部に自然面を残すが他の部分に見られる剝離により，自然面を取り除く作業を行っている。19は平担打面を持ち，下端に見られる剝離面は4の左側の剝離面につづく面である。打面形成の際に85に先だって剝取されたものである。4と同じように，自然面を取り除くためと考えられる大・小の不規則な方向からの剝離面が複雑に切り合っている。また，剝片の形が主要剝離面側に湾曲している。85は平担打面を持つ横長の剝片である。下端部には，ある調整のためと考えられる剝離面が見られる。この剝片の剝取で下設の打面が完成している。10は前述の作業を含む原石から目的剝片の剝取という一連の過程を経たものである。上・下両面ともに全面に及ぶと考えられる1枚の剝片剝離の後，数回の打面調整を行っている。また，上設の打面右部分に自然面を残すことから，あまり打面再生は行われなかったと考えられる。さらに，使用された原石は，ほぼ拳大程度の大きさのものが推察でき，打面形成の後，頭部調整を施し素材剝片を剝取している。石質が同一であり，石核の剝離作業面に残されている面の大きさ・形態などが類似していることから，183・26のようなナイフ形石器の素材剝片が剝取されたのであろう。

ブランク

耕作土から出土したもので，剝片を素材としている。正面に素材としている剝片の主要剝離面が残存している。当ブランクの製作は，剝片の打面側を下にし，正面の下部に見られる剝離面によって打面を除き，上部を折断している。さらに，裏面に数回の剝離を施している。その後，細部調整を周縁から行い，舟底状のブランクを作出している。

石　材

今回の調査で出土した石器群は，チャートの1点を除くと他はすべて流紋岩を石材として用いている。これらの流紋岩は，表面の肉眼観察により，色調や表面の模様などの違いから，4つのグループに分類できそうである。

a類　黄灰色で流状の模様がほぼ一面に，しかも複雑に見られる。

b類　黒灰色・黄白色・白色・褐色などの細い斑晶が点在し，流状の模様は少し見られる。表面が全般的にやや荒い。

c類　明黄灰色を呈し，a類に比較して全体に白っぽく黄色味が強く，しかも流状の模様も少ない。

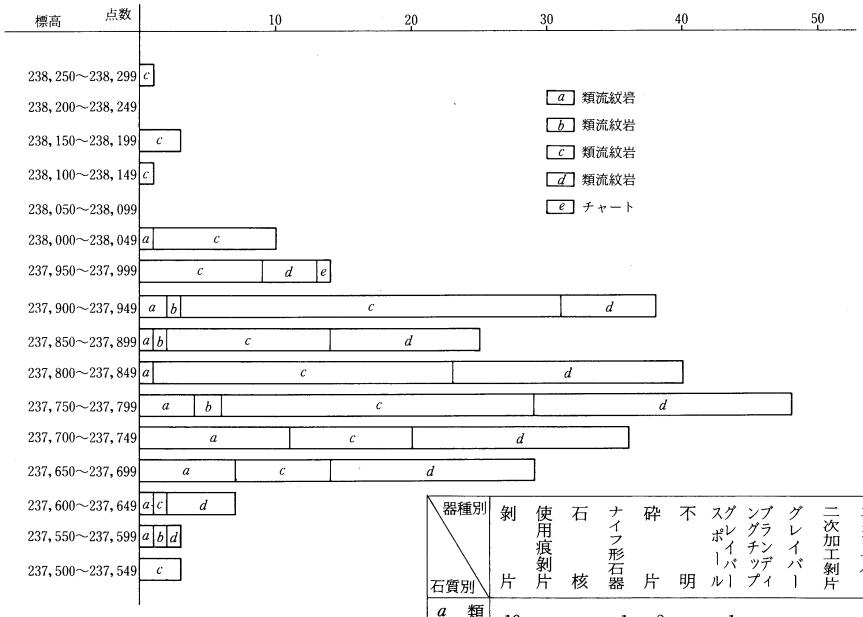
d類　茶褐色の流状の模様が見られ，中には白い流状の模様も見られる。光沢がありチャートのような透明感がある。これまで，「ホルンフェルス」と呼ばれているものにもっとも近い。

石質と石器群については次の様な傾向がうかがえる。

a類は29点あり，垂直分布図を見るとd類とほぼ同じ分布状態ある。a類を石材としているものは，剝片・砕片・グレイバースポールなどであり，石器は皆無である。

b類はわずか5点であるが，ナイフ形石器・彫器・使用痕剝片などの石器に使用されている石材である。剝片・砕片が皆無である。数が少ないことから他から搬入されたものと考えられる。

c類は128点，D類は95点と数的に多く，本石器群の主体をなす石質である。平面分布図に見られるように，それぞれブロック状に存在している。いっぽう垂直分布では，石器群包含層中に両類共上部から下部にかけてまんべんなく存在するが，上部ではc類が多く，下部ではd類が多いという傾向がみられる。微妙な時間の違いがあった可能性もあるが，石器類の形態および，遺跡自体の傾斜からすると，やはり同一時期と考えていた方がよさそうである。



器種別／石質別	剝片	使用痕剝片	石核	ナイフ形石器	砕片	不明	グレイバースポール	ブランチングプティ	グレイバー	二次加工剝片	スクレイパー	合計
a 類流紋岩	19			1	8		1					29
b 類流紋岩		2		2					1			5
c 類流紋岩	85	3	1	5	24	2	1	5		1	1	128
d 類流紋岩	52	2		4	25	2	2	6	1	1		95
チャート					1							1
合計	156	7	1	12	58	4	4	11	2	2	1	258

第22図　流紋岩の石質別垂直分布

石器群のまとめ

今回，駒方古屋遺跡で出土した258点の石器類の石材は，チャートが1点のみで，外はすべて流紋岩あるいはホルンフェルス（流紋岩d類）を使用している。この石材の選択は、大野川流域での一般的なあり方と一致するものである。

258点の石器類は，剥片・砕片が主体を占め，ナイフ形石器などのいわゆる石器の割合が少ない。また，剥片石器のみで礫核石器などが皆無である。

ナイフ形石器は欠損品を含めて12点出土しており，当石器群の主要な石器である。その加工部位では，一側縁加工・二側縁加工・部分加工のものがそれぞれ出土しており，ナイフ形石器の基本的な加工形態がほぼ整っているとみることができよう。縦長剥片を素材に，その上下端を斜め方向に切断した3点の二側縁加工のナイフ形石器が存在している。

彫器は2点出土しており，いずれも小形で，彫刀面は側辺に沿った斜刃型と主要剥離面と並行する平刃型である。

スクレイパーはわずか1点のみと少なく，しかもその加工は不定形な小形の剥片の縁辺に沿って微細な調整が見られるだけである。大野川の中流域で一般に知られているスクレイパーとは大きく異なっており，その認定に問題が残るであろう。

二次加工および使用痕のある剥片は，縦長剥片を素材に選択しているようであるが，それでいて，一方では剥片の形態・大きさに関係なく用いているようである。いずれにせよ，9点という出土例からでは，二次加工剥片や使用痕剥片にどのような剥片を用いていたかという1つの傾向を把握するのは困難である。

剥片の剥離技術の中に，石器素材のための目的的剥片として縦長剥片を得るための技術が看取される。打面を上下のどちらか一端に設けるものと両端に設けるものとがある。剥片の打面の多くは平坦打面である。頭部調整は顕著でないが，側面の調整剥離はかなり丹念に施されているようである。

石器・剥片それに石核から当遺跡の剥片剥離技術をうかがってみる。

まず，全体的な傾向として石器・剥片ともに小さなものが多いことである。主要な石器であるナイフ形石器では最大のものが4.9cmである。いっぽう剥片では9.1×4.7cmのものが最大であるがその大半は3cm前後の大きさである。当遺跡での目的的な剥片は縦長剥片と考えられ，ナイフ形石器や使用痕のある剥片などの石器は縦長剥片が素材に用いられている。その縦長剥片の剥離方向では，ほぼ1方向のものと，相対する2方向のものとがある。すなわち大剥離面の剥離の方向が主要剥離面の方向と一致するものとそうでないものとの2つの剥離方法があったことが考えられる。縦長剥片の外に，周辺からの不規則な方向による剥離作業面をもつ不定形剥片が出土しているが，これらの剥片は石器としての目的的な剥片でなく，石器の素材としての縦長剥片を得るための調整剥片的な要素が強い。

主要剥離面の剥離方向と大剥離面のそれとが一致する単設打面の石核より剥離された目的的

剝片では，大剝離面のほぼ中央に比較的大きな剝離面が見られるが，その両端の剝離面は剝離方向が不規則で，しかも狭く急斜度（主要剝離面との角度が大きい）というほぼ共通した剝離方法の存在が推察される。

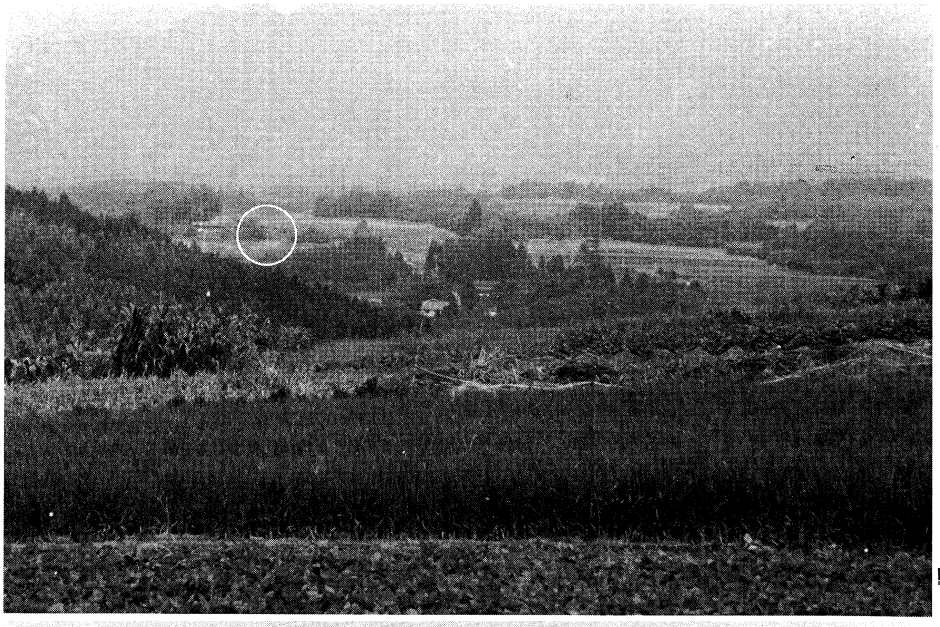
一方主要剝離面の剝離方向と大剝離面のそれとが異なる縦長剝片は，石核の上・下端に打面を持つ，いわゆる両設打面の石核から剝離されたものと考えられる。実際，上下両端に打面を有する縦長剝片や１点出土している石核も両端に打面が存在する。特に，この石核と剝片との接合資料から，両設打面石核の剝片剝離技術の一端をうかがうことができる。

剝片の打面は平坦打面のものと調整打面の両者がみられるが，数量的には平坦打面のものの方が多い。また，打面部周辺の調整，すなわち頭部調整についても施されているものとそうでないものとがあるが，全体的には顕著でない。

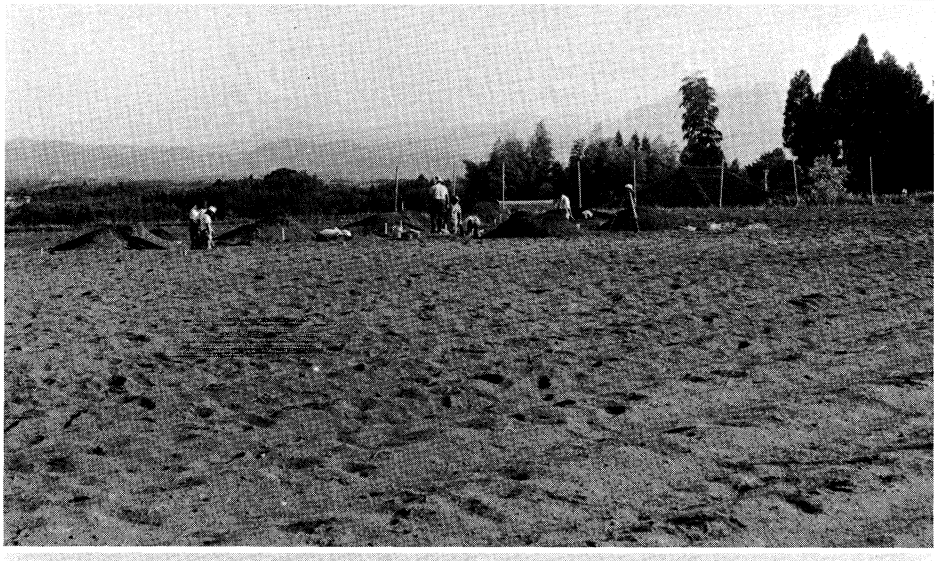
駒方古屋遺跡の石器群は暗色帯の漸移層から，暗色帯（黒色帯）の上部にかけて出土している。暗色帯と呼ばれている黒味の強い土層は，大野川流域の火山降下堆積層中に普遍的に認められるものであり，しかもこの暗色帯の上位の土層にＡＴが位置することが，これまでの調査から明かにされている。土層の層位的な観察による限り，暗色帯およびその直上の暗色帯の漸移層と考えられる土層はＡＴの降下堆積以前の土層と判断できる。

そこで，今回出土した石器群は，その出土状況から単一の文化層として把握でき，その時期はＡＴの降下堆積直前の時期が考えられる。

これまで大野川流域において，ＡＴより下位の土層から石器が発見されている遺跡として大野郡清川村の岩戸遺跡，同三重町百技小学校遺跡，大野町駒方遺跡Ｃ地点などがある。駒方古屋遺跡の石器群については，これらの諸遺跡での石器群との比較検討が必要と思われる。今年の夏に実施した駒方古屋の第２次調査および来夏予定している第３次調査を踏まえた上で，それを行いたい。それによって，駒方遺跡の石器群の様相をはじめとして，大野川流域におけるＡＴ下位の石器群の究明の１つの手がかりが得られるものと期待している。

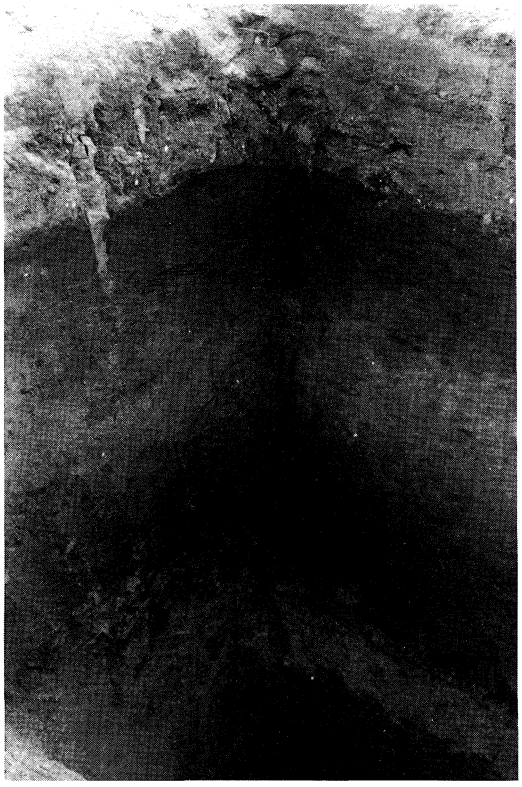


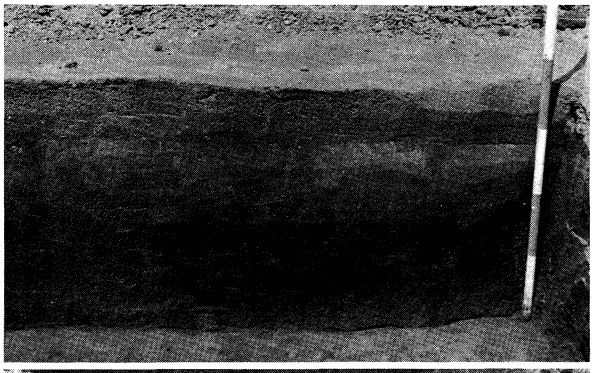
駒方古屋遺跡遠景
(東南より望む)

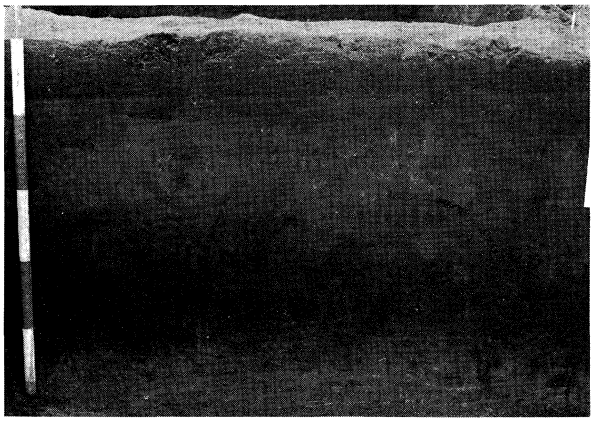


駒方古屋遺跡の
調査風景

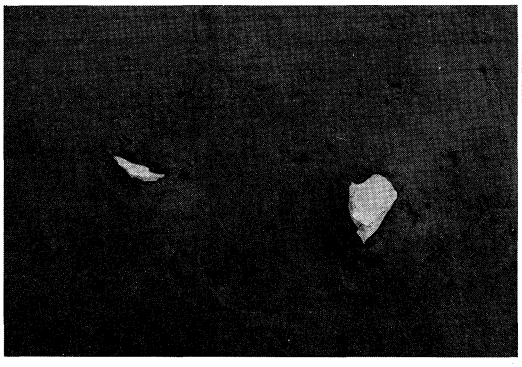
駒方古屋遺跡近景

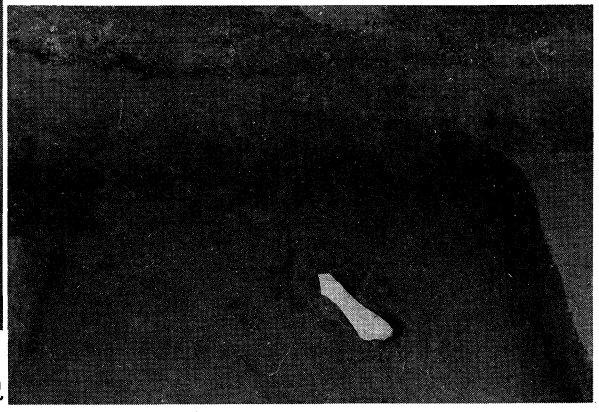




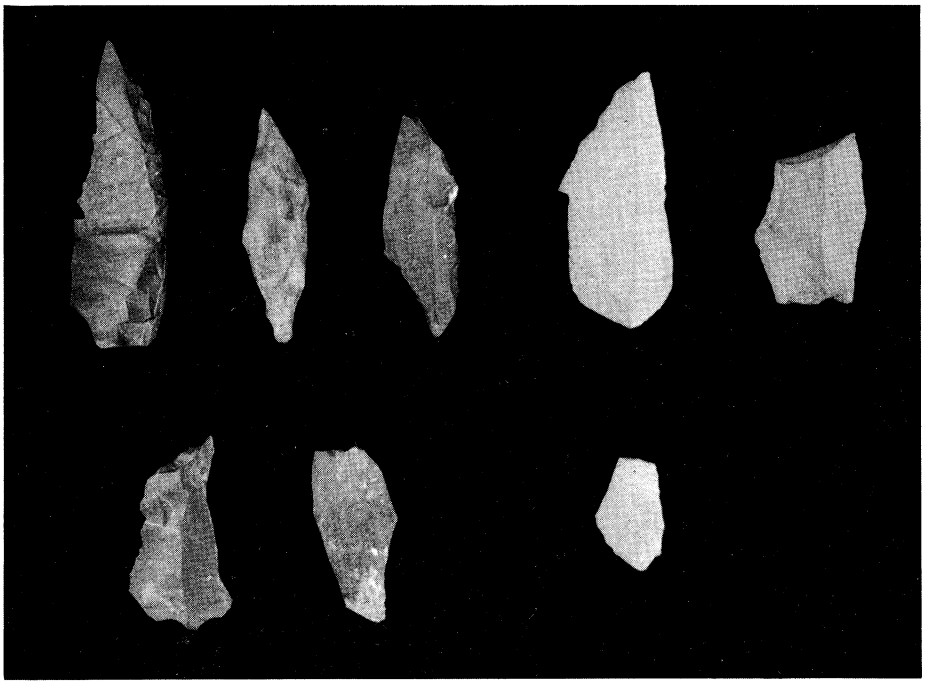


駒方古屋遺跡の土層断面



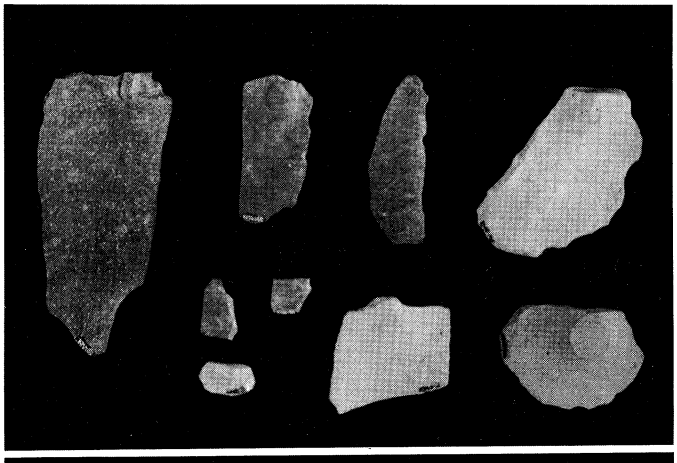


駒方古屋遺跡の石器類出土状況

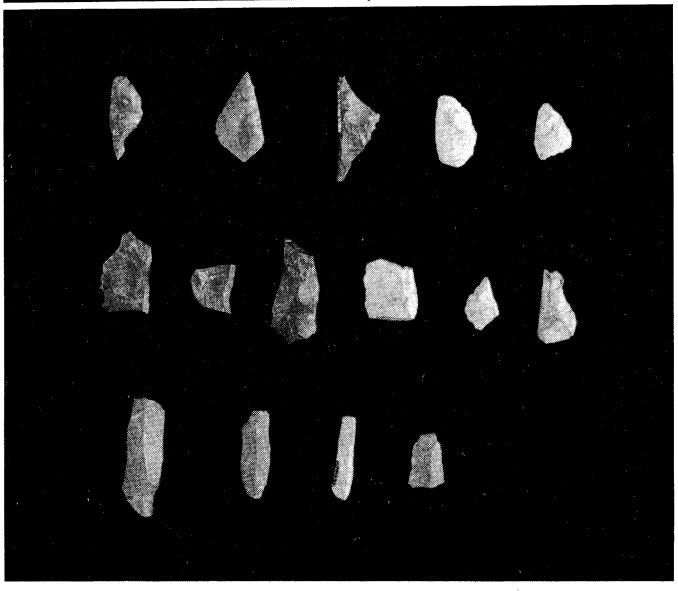


ナイフ形石器

彫器・掻器（スクレイパー）

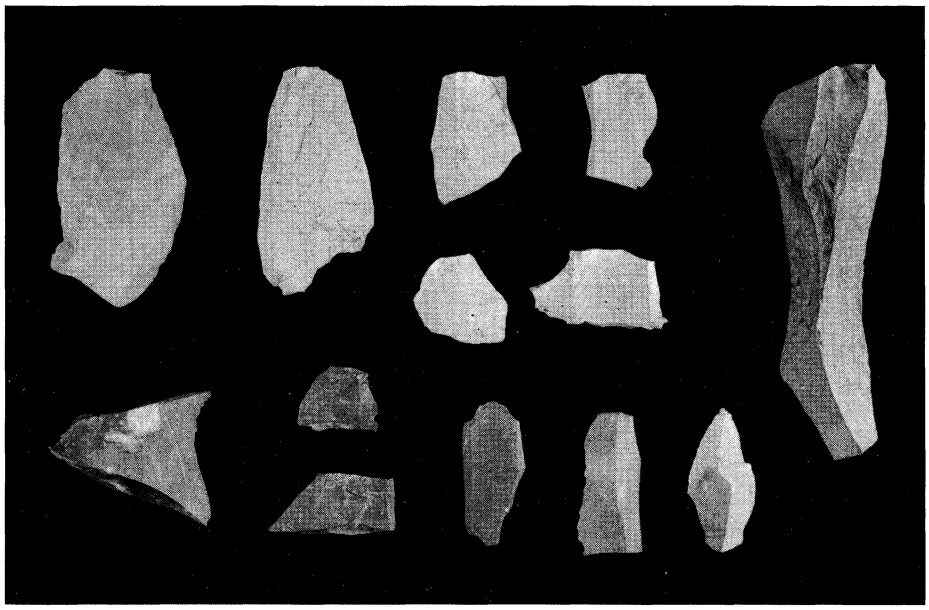


使用痕剝片・二次加工剝片

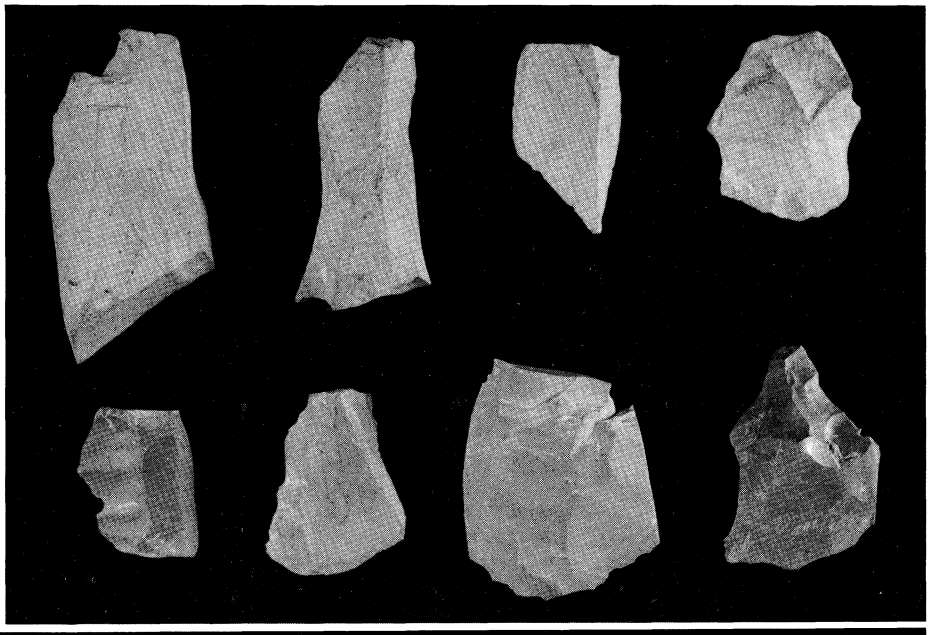


ブランティングチップ

グレイバースポール

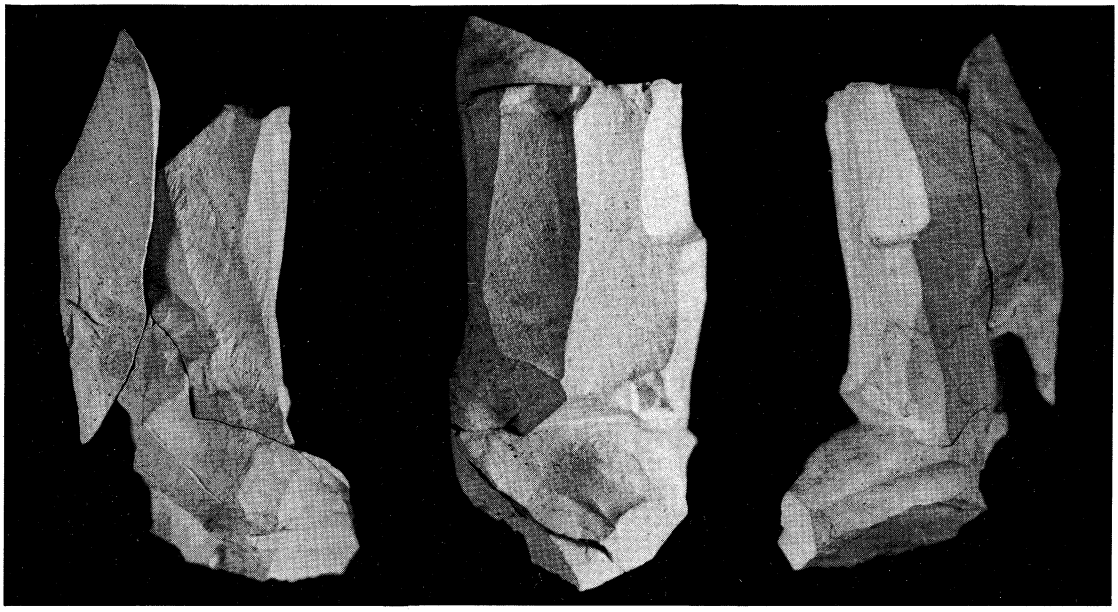


剝　片

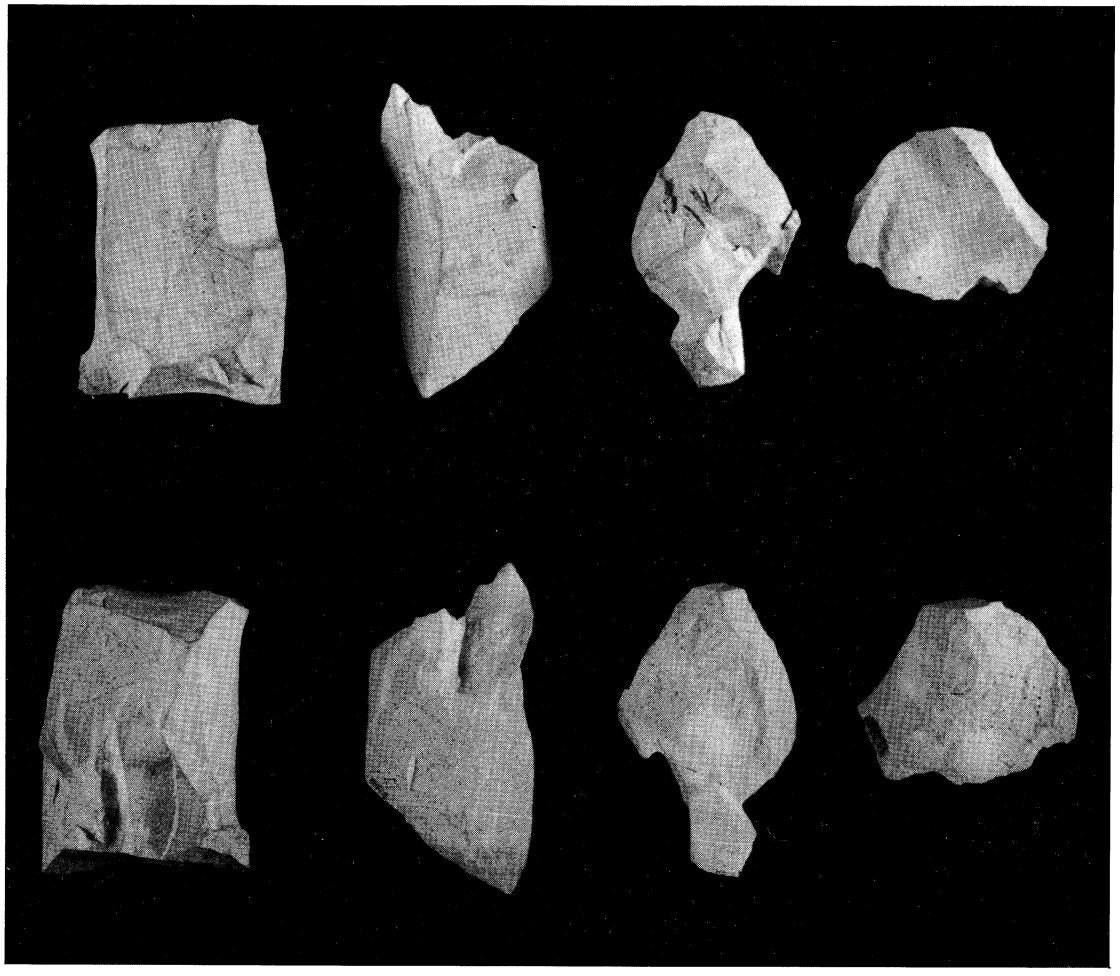


剝　片

細石核ブランク



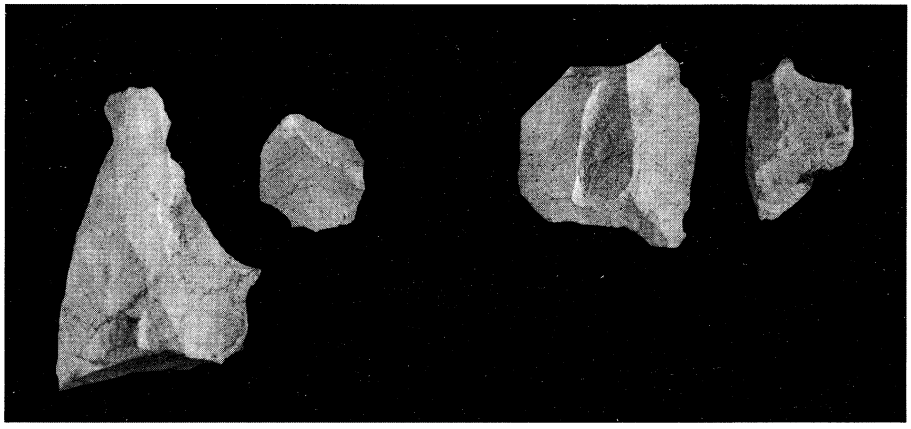
剝片と石核の接合資料



石核・剝片

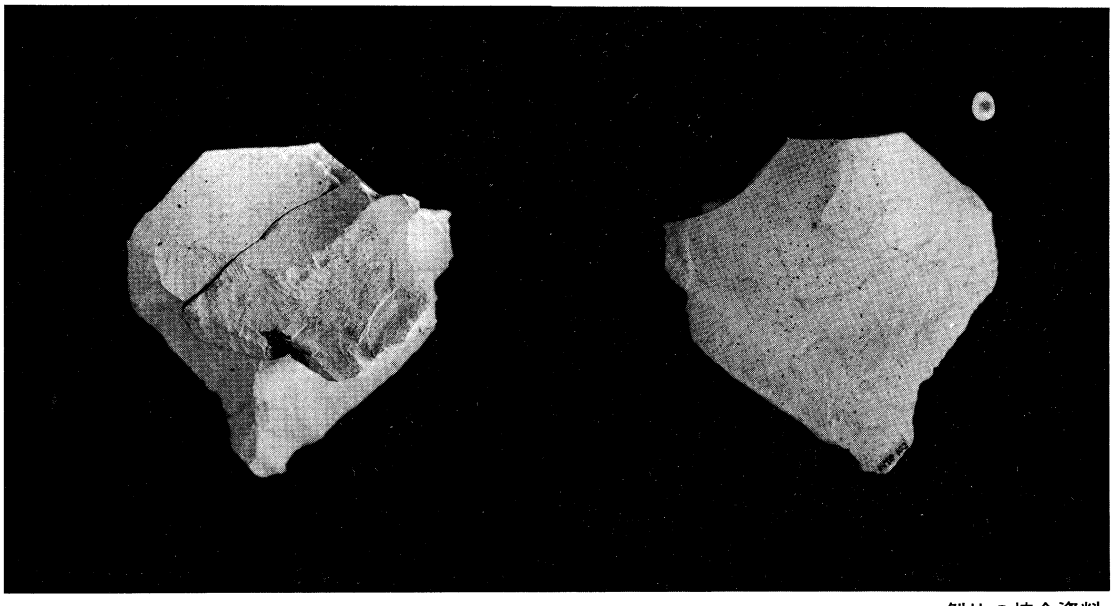
⇧

剝片の接合資料

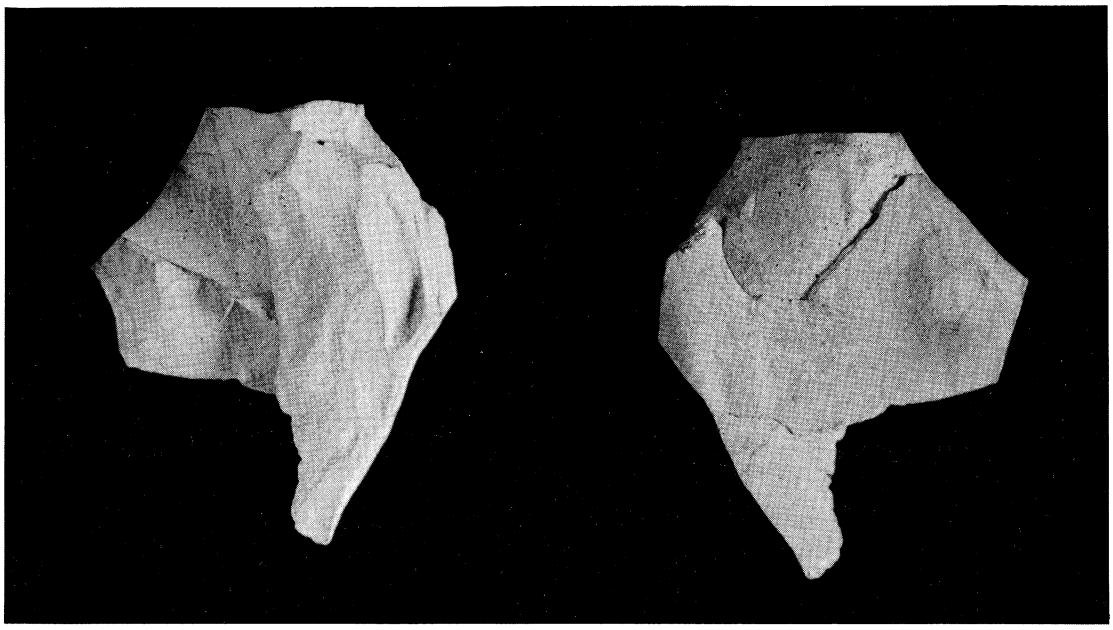


剝片

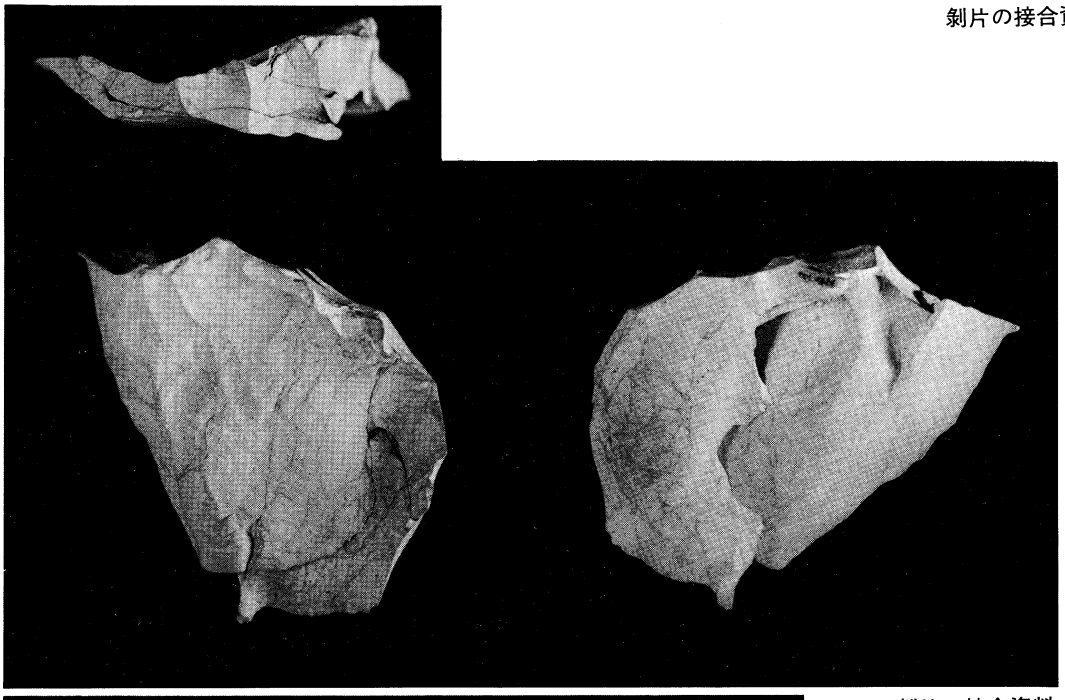
⇩



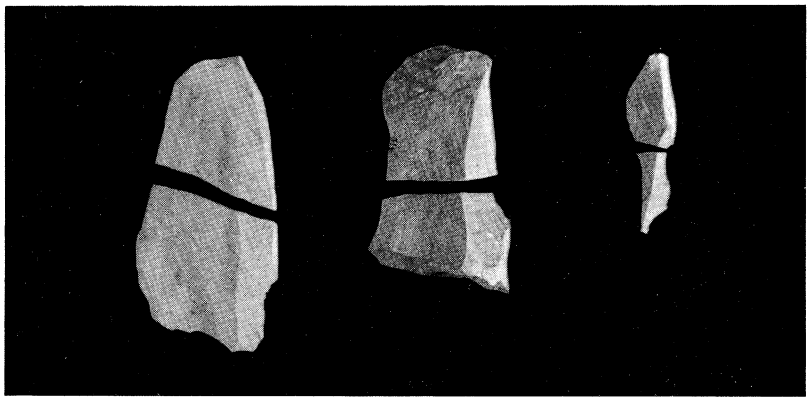
剝片の接合資料



剝片の接合資料



剝片の接合資料



半折剝片の接合

駒方古屋遺跡遺物一覧表

No.	Grid	層位	器　　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重　量(g)	石質	接　　合
1	a¹	III	剝片	流紋岩	1.65	0.9	0.3	0.460	a	
2	A	III	使用痕剝片		3.6	3.9	0.5(3.15)	8.610	c	
3	A	III	剝片		2.7	3.55	0.75(0.8)	8.115	c	
4	A	III	剝片		7.35	4.15	1.9	45.646	c	No10+19+85
5	A	III	剝片		6.55	1.9	0.95(1.15)	9.120	c	No14+144
6	A	III	剝片		3.4	2.9	0.5(1.8)	5.040	c	No.260
7	A	III	剝片		1.25	2.2	0.3(0.95)	0.930	c	
8	A	III	剝片		5.5	5.65	1.3	19.015	c	
9	A	IV a	剝片		1.4	1.3	0.4	0.470	c	
10	A	III	石核		6.88	5.02	3.31(上4.21 下4.90)	143.255	c	No.4 +19+85
11	A	III	剝片		1.7	1.2	0.3	0.490	c	
12	A	III	剝片		1.9	3.05	0.6	2.120	c	
13	A	III	剝片		1.5	2.5	0.7	2.915	c	
14	A	III	剝片		6.7	7.1	1.5(7.2)	87.965	c	No.5 +144
15	A	III	剝片		0.93	1.01	0.16	0.210	c	
16	A	III	剝片		2.65	1.7	0.3	1.225	c	
17	A	III	剝片		5.2	3.0	0.4(2.0)	9.135	c	
18	A	III	剝片		7.55	3.75	1.65(0.75)	32.385	c	
19	A	III	剝片		6.92	4.17	2.02(1.2)	44.600	c	No.4 +10+85
20	A	IV a	剝片		1.65	1.5	0.65	1.315	c	
21	A	IV b	剝片		2.15	3.95	0.4(2.35)	4.130	c	
22	A	IV b	剝片		2.35	2.95	0.5(1.85)	3.785	c	
23	A	IV b	剝片		1.55	1.15	0.45	0.625	c	
24	A	III	剝片		6.35	5.25	0.7(1.95)	21.310	c	No.28+127
25	A	III	ナイフ形石器		2.8	1.0	0.65	1.665	b	
26	A	III	ナイフ形石器		3.35	2.2	0.6(1.5)	4.760	c	
27	A	III	砕片		0.9	0.65	0.2(0.6)	0.150	d	
28	A	III	剝片		3.95	5.95	0.45(2.8)	32.090	c	No.24+127
29	A	III	不明		1.25	0.9	0.4	0.490	d	
30	A	III	砕片		0.6	0.5	0.2	0.130	c	
31	A	III	剝片		1.45	1.6	0.2(0.7)	0.615	c	
32	A	III	剝片		1.6	1.05	0.5	0.505	c	
33	A	IV a	砕片		0.8	0.7	0.2(0.5)	0.115	a	
34	A	III	ナイフ形石器		1.9	0.8	0.8	1.275	c	
35	A	III	砕片		0.85	0.5	0.15	0.095	d	
36	A	III	剝片		2.65	1.35	0.65	0.790	c	
37	A	II	剝片		2.35	3.4	0.6	3.300	c	
38	A	III	砕片		0.95	0.6	0.25	2.810	c	
39	A	III	砕片		0.7	0.5	0.1	0.105	c	
40	A	III	不明		0.7	1.15	0.25(0.45)	0.175	c	
41	A	III	砕片		0.53	0.65	0.15(0.16)	0.100	c	
42	A	III	剝片		0.85	0.9	0.15	0.200	c	
43	A	III	砕片		1.15	0.8	0.25	0.200	c	

No.	Grid	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重量(g)	石質	接合
44	A	III	グレイバースポール	流紋岩	1.25	0.4	0.2(0.2)	0.135	d	
45	A	III	砕片		0.5	0.95	0.15	0.115	d	
46	A	III	砕片		0.7	1.0	0.15	0.120	c	
47	A	III	砕片		0.9	0.9	0.25	0.200	c	
48	A	III	砕片		0.4	0.52	0.1(0.23)	0.090	d	
49	A	III	剥片		1.4	1.4	0.35	0.470	c	
50	A	III	剥片		0.7	0.9	0.2	0.200	d	
51	A	III	剥片		0.65	1.27	0.15(0.73)	0.150	c	
52	A	III	グレイバースポール		1.23	0.25	0.24	0.090	c	
53	A	III	剥片		2.15	2.5	0.2(0.46)	1.280	d	
54	A	III	剥片		1.66	1.04	0.65	0.750	c	
55	A	III	ナイフ形石器		1.13	0.28	0.36	0.105	c	
56	A	III	砕片		0.55	0.95	0.2	0.140	c	
57	A	III	剥片		2.95	1.1	0.3	0.895	c	
58	A	III	剥片		1.04	1.08	0.21	0.215	c	
59	A	III	砕片		0.55	0.5	0.15	0.070	c	
60	A	IVa	プランティングチップ		0.55	0.68	0.18(0.19)	0.45	c	
61	A	IVa	剥片		1.39	1.58	0.3(1.3)	0.860	c	
62	A	IVa	プランティングチップ		0.8	0.75	0.28	0.115	d	
63	A	IVa	剥片		1.56	1.28	0.24	0.490	d	
64	A	IVa	砕片		1.02	0.56	0.15	0.115	d	
65	A	IVa	使用痕剥片		8.68	3.85	1.14(2.9)	46.835	b	
66	A	IVa	砕片		0.7	0.85	0.15	0.145	c	
67	A	IVa	砕片		0.85	0.7	0.1(0.2)	0.110	c	
68	欠									
69	A	IVb	剥片		1.15	1.0	0.4	0.400	c	
70	A	IVb	砕片		0.64	0.91	0.18	0.130	c	
71	A	IVb	砕片		1.05	0.55	0.15	0.105	c	
72	A	IVa	砕片		0.68	0.36	0.29	0.100	a	
73	A	IVa	砕片		0.6	0.5	0.15	0.900	d	
74	A	IVa	剥片		1.25	0.75	0.2	0.170	c	
75	A	IVa	砕片		0.75	0.4	0.15	0.090	c	
76	A	IVa	剥片		1.4	0.8	0.15	0.180	c	
77	A	IVa	剥片		1.21	0.61	0.35	0.235	d	
78	A	IVb	砕片		1.15	0.6	0.3	0.190	c	
79	A	IVb	剥片		1.2	1.67	0.18	0.375	c	
80	A	IVb	剥片		2.79	1.38	0.56(1.24)	1.275	c	
81	A	IVb	剥片		0.65	1.5	0.4	0.330	c	
82	A	IVa	剥片		1.1	0.84	0.3(0.19)	0.250	c	
83	A	IVa	砕片		0.98	0.49	0.12	0.900	d	
84	欠									
85	A	III	剥片		4.35	4.9	1.25(1.9)	23.305	c	No.4 +10+19
86	A	III	剥片		0.58	1.74	0.55	0.390	c	
87	A	III	剥片		1.1	0.65	0.25(0.3)	0.220	c	
88	A	III	剥片		1.98	1.09	0.45(0.29)	0.740	d	
89	A	III	砕片		0.85	0.6	0.1	0.110	c	

No.	Grid	層位	器　　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重　量(g)	石質	接　　合
90	A	III	砕片	流紋岩	0.8	0.5	0.25	0.165	c	
91	A	III	剥片		2.85	2.2	0.2(1.5)	2.330	c	
92	A	II	剥片		1.35	1.11	0.2	0.300	c	
93	A	II	彫器		3.48	1.56	0.58	4.550	b	
94	A	IV a	剥片		0.6	0.65	0.2	0.375	c	
95	A	IV a	砕片		1.35	1.2	0.25	0.125	c	
96	A	III	剥片		1.15	0.6	0.35(0.27)	0.220	c	
97	A	III	ブランティングチップ		5.5	1.07	0.25(1.01)	0.100	c	
98	欠									
99	A	IV b	不明		1.65	0.7	0.6	0.870	c	
100	A	IV b	使用痕剥片		3.01	4.54	0.26(3.93)	7.300	c	
101	A	IV a	剥片		4.24	1.12	1.4	6.750	c	
102	A	IV a	剥片		3.76	2.45	0.53(1.74)	5.110	c	
103	A	III	二次加工剥片		5.45	3.58	0.73(1.85)	16.475	c	
104	A	III	剥片		2.37	1.6	0.4(1.13)	1.780	c	
105	A	II	剥片		3.82	1.73	0.4	2.095	d	
106	A	II	グレイバースポール		1.65	0.52	0.27(0.3)	0.235	d	
107	A	III	剥片		1.08	0.58	0.2	0.150	d	
108	A	III	剥片		3.15	2.55	0.27(1.76)	1.575	c	
109	A	III	砕片	チャート	0.5	0.3	0.25	0.070	c	
110	A	III	剥片	流紋岩	1.5	1.4	6.2	0.980	c	
111	A	III	剥片		2.78	1.9	0.4(1.67)	1.945	c	
112	A	III	剥片		1.71	1.52	0.24(1.4)	0.710	c	
113	A	III	剥片		1.3	1.26	0.37	0.400	c	
114	A	III	剥片		5.08	4.2	0.56(2.9)	14.225	c	
115	A	III	剥片		1.15	1.68	0.17(1.16)	0.350	c	
116	A	III	剥片		3.4	1.39	0.42	1.705	c	
117	欠									
118	A	III	ナイフ形石器		1.98	0.69	0.25	0.325	a	
119	A	III	剥片		3.5	2.04	1.66	3.765	c	
120	A	III	砕片		0.86	0.62	0.18	0.120	d	
121	A	III	剥片		0.91	1.44	0.2	0.345	d	
122	A	III	ブランティングチップ		1.48	0.68	0.47	0.370	d	
123	A	III	剥片		1.97	0.72	0.2	0.300	d	
124	A	III	剥片		3.92	1.9	0.8	3.660	a	
125	A	III	剥片		1.3	0.8	0.13	0.170	d	
126	A	IV a	剥片		9.05	4.74	1.1(1.6)	48.290	c	
127	A	IV a	剥片		7.62	3.59	6.8(2.25)	15.640	c	No.24＋28
128	A	IV a	剥片		6.11	3.24	0.73(0.97)	13.085	c	
129	A	IV a	剥片		1.19	1.63	1.0	1.170	d	
130	A	IV a	ナイフ形石器		4.83	1.86	0.62(1.08)	5.340	d	
131	A	IV a	剥片		3.41	5.73	1.54	16.715	d	
132	A	IV a	剥片		1.38	0.77	0.63	0.610	c	
133	A	III	剥片		2.45	0.75	0.57	1.880	c	
134	A	III	二次加工剥片		1.85	1.23	0.41	0.940	d	
135	A	III	砕片		0.67	0.52	0.17	0.110	d	

No.	Grid	層位	器　　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重　量(g)	石質	接　　合
136	A	III	使用痕剥片	流紋岩	1.08	1.24	0.2	0.325	d	
137	A	IVb	砕片		0.64	0.61	0.23	0.140	c	
138	A	IVb	剥片		4.53	3.25	0.49(1.9)	7.955	c	
139	A	IVb	スクレイパー		1.3	2.23	0.4(1.35)	1.365	c	
140	A	IVb	剥片		6.1	4.3	1.42	27.230	d	
141	A	IVb	剥片		1.38	1.16	0.41(0.6)	0.500	c	
142	A	IVa	剥片		5.8	6.5	0.7(2.55)	24.365	c	表採No.6
143	A	IVa	剥片		1.35	1.68	1.9(1.8)	1.110	c	
144	A	IVa	剥片		4.30	7.85	0.65(5.1)	25.340	c	No.5＋14
145	A	IVa	使用痕剥片		4.53	2.17	0.72(1.07)	6.040	d	
146	A	IVa	剥片		0.61	1.53	0.28(0.18)	0.255	d	
147	欠									
148	A	IVa	砕片		0.5	0.66	0.15(0.38)	0.100	d	
149	A	IVa	剥片		1.31	1.08	0.28(0.3)	0.410	d	
150	A	IVa	砕片		0.85	0.43	0.14(0.33)	0.110	d	
151	A	IVa	剥片		1.2	0.5	0.25	0.160	d	
152	A	IVa	ブランディングチップ		0.75	1.2	1.5	0.100	d	
153	A	IVa	砕片		0.95	0.5	0.15	0.115	d	
154	A	IVa	砕片		0.6	0.69	0.18	0.105	d	
155	A	IVa	砕片		0.6	0.7	0.2	0.125	d	
156	A	IVa	剥片		2.6	1.95	0.3(0.6)	1.325	d	
157	A	IVa	剥片		0.82	0.98	1.8(0.65)	0.195	d	
158	A	III	砕片		0.34	0.52	0.09	0.070	d	
159	A	IVa	剥片		1.6	2.28	0.43(1.05)	2.325	d	
160	A	IVa	剥片		1.6	2.05	0.45(1.1)	0.880	c	
161	A	IVb	砕片		0.9	0.55	0.2	0.145	c	
162	A	IVb	剥片		1.45	1.3	0.5(1.1)	0.780	d	
163	A	IVb	ブランディングチップ		1.2	0.5	0.25	0.120	d	
164	A	IVb	砕片		0.8	0.4	0.18	0.130	a	
165	A	IVb	砕片		0.7	0.75	0.18(0.5)	0.150	d	
166	A	IVb	剥片		0.8	1.05	0.15	0.175	c	
167	A	IVb	剥片		1.75	3.45	0.6(2.0)	3.505	d	
168	A	IVb	剥片		0.95	1.95	0.5	0.635	d	
169	A	IVb	砕片		0.2	0.2	0.1	0.065	d	
170	A	IVa	剥片		0.65	1.1	2.0	0.275	d	
171	A	IVa	剥片		1.35	0.95	0.15	0.280	d	
172	A	IVa	砕片		0.4	0.8	0.11	0.090	d	
173	A	IVa	砕片		0.65	0.8	0.15	0.155	d	
174	A	IVa	砕片		0.4	0.35	0.1	0.070	d	
175	A	IVa	剥片		1.55	1.4	0.15	0.360	d	
176	A	IVa	砕片		0.55	0.4	0.25	0.110	a	
177	A	IVa	剥片		1.5	2.3	0.45	1.415	d	
178	A	IVa	砕片		0.7	0.45	0.09	0.080	d	
179	A	IVa	不明		0.5	1.0	0.2	0.025	d	
180	A	IVa	剥片		1.4	1.5	0.19	0.370	d	
181	A	IVa	ブランディングチップ		1.2	0.8	0.3	0.145	d	

No.	Grid	層位	器　　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重　量(g)	石質	接　　合
182	A	IV a	剝片	流紋岩	1.4	1.6	0.15(0.3)	0.340	d	
183	A	IV a	ナイフ形石器		4.9	2.1	0.65	6.660	c	
184	A	IV a	剝片		1.26	1.0	0.11	0.200	d	
185	A	IV b	剝片		0.95	0.82	0.25	0.300	d	
186	A	IV b	剝片		1.9	0.95	0.2	0.380	d	
187	A	IV b	剝片		0.85	1.8	0.3	0.310	d	
188	A	IV a	剝片		0.65	1.65	0.25(0.5)	0.295	d	
189	A	IV a	ナイフ形石器		1.9	0.9	0.6	0.815	d	
190	A	IV a	剝片		1.8	1.1	0.45	0.715	d	
191	A	IV a	剝片		0.8	1.05	0.3	0.295	d	
192	A	IV a	剝片		1.05	0.75	0.35	0.240	c	
193	A	IV a	剝片		0.6	1.55	0.19	0.160	d	
194	A	IV b	剝片		2.3	1.2	0.4	1.055	d	
195	A	IV a	砕片		0.9	8.5	0.15	0.160	d	
196	A	IV a	剝片		1.2	1.1	0.7	1.020	d	
197	A	III	剝片		1.3	2.0	0.55	1.120	d	
198	A	IV a	砕片		0.75	0.55	0.15	0.110	d	
199	A	III	砕片		0.9	0.95	0.25	0.240	a	
200	A	IV a	砕片		0.5	0.4	0.1	0.075	d	
201	欠									
202	A	III	剝片		0.89	0.61	0.15	0.13	a	
203	欠									
204	A	III	砕片		0.53	0.14	0.09	0.060	d	
205	A	IV b	剝片		1.88	1.24	0.28	0.580	c	
206	A	IV a	ブランディングチップ		0.76	0.82	0.26	0.225	c	
207	A	IV a	剝片		1.13	1.78	0.42	0.740	d	
208	A	III	剝片		4.17	4.04	0.48	10.320	c	No.138
209	a^2	II	ナイフ形石器		4.1	1.5	0.58	2.720	d	
210	a^2	II	剝片		0.56	1.18	0.21	0.180	d	
211	欠									
212	a^2	II	剝片		1.21	1.6	0.13	0.350	c	
213	a^2	III	剝片		2.67	1.17	0.54	1.210	d	
214	a^2	III	剝片		1.67	1.61	0.19	0.710	d	
215	a^3	II	剝片		0.9	1.06	0.19	0.160	d	
216	a^3	III	ナイフ形石器		4.44	1.6	0.71	4.595	b	
217	a^3	III	剝片		1.4	1.63	0.28	0.665	c	
218	a^3	III	砕片		0.43	0.34	0.1	0.085	a	
219	a^3	III	剝片		3.2	1.3	0.34	1.230	a	
220	a^3	III	砕片		0.65	0.35	0.15	0.080	c	
221	a^3	III	砕片		0.61	0.7	0.22	0.150	a	
222	a^3	III	剝片		0.86	1.07	0.48	0.435	a	
223	a^3	III	剝片		1.69	1.49	0.49	0.860	a	
224	a^3	III	砕片		0.65	0.3	0.2	0.080	a	
225	a^3	IV a	剝片		1.23	0.87	0.15	0.240	d	
226	a^3	IV a	剝片		0.75	1.02	0.28	0.225	c	
227	a^3	III	剝片		0.8	1.07	0.38	0.390	d	

No.	Grid	層位	器　　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(打面長)(cm)	重　量(g)	石質	接　　合
228	a^3	III	剝片	流紋岩	1.47	3.38	0.21(3.0)	1.395	d	
229	a^3	III	剝片		6.3	3.7	0.58(1.41)	18.615	c	
230	a^4	II	剝片		1.98	1.35	0.67	1.200	c	
231	a^4	II	剝片		0.88	1.22	0.16(0.46)	0.220	d	
232	a^4	II	剝片		2.47	1.17	0.3(0.64)	1.010	a	
233	a^4	III	剝片		2.9	1.45	0.59	0.870	c	
234	a^4	III	彫器		3.7	2.05	0.32	2.635	d	
235	a^4	III	使用痕剝片		5.12	1.79	0.42(0.3)	3.885	b	
236	a^4	IV a	剝片		0.72	1.28	0.23(1.49)	0.230	c	
237	a^4	III	ナイフ形石器		4.6	1.35	0.76	3.560	d	
238	a^4	III	剝片		0.81	1.85	0.49	0.700	a	
239	a^5	III	ブランディングチップ		0.7	1.38	0.26	0.135	d	
240	a^5	III	剝片		0.9	0.79	0.16	0.100	d	
241	a^5	III	使用痕剝片		1.0	1.81	0.35(1.3)	0.900	c	
242	a^5	III	砕片		0.64	0.62	0.11	0.080	c	
243	a^5	III	剝片		5.13	3.75	0.83(1.72)	12.725	a	
244	a^5	III	砕片		0.41	0.59	0.15	0.090	c	
245	a^5	III	ブランディングチップ		0.51	1.0	0.19	0.105	c	
246	a^5	III	剝片		0.9	1.19	0.22	0.320	c	
247	a^5	III	剝片		2.98	2.1	0.42(1.37)	2.290	c	
248	a^5	III	剝片		10.4	3.65	1.44(2.98)	44.885	a	
249	a^5	III	剝片		2.38	0.92	0.27	0.450	a	No.262
250	a^5	IV a	剝片		0.91	1.84	0.25(1.5)	0.445	c	
251	a^5	III	ブランディングチップ		0.53	0.77	0.2	0.040	c	
252	a^5	IV a	剝片		0.86	1.21	0.18(0.67)	0.260	a	
253	a^5	III	剝片		1.36	1.01	2.02	0.180	a	
254	a^5	IV a	剝片		2.79	2.03	0.53(0.95)	2.795	a	
255	a^5	IV a	剝片		1.13	1.1	0.37	0.300	d	
256	a^5	III	剝片		2.46	1.57	0.32(0.84)	1.400	a	
257	a^5	III	剝片		2.61	3.92	1.44	13.930	a	No.265
258	a^5	IV a	剝片		3.88	1.78	0.51(0.89)	3.370	a	
259	a^5	IV a	グレイバースポール		0.71	0.54	0.15(0.21)	0.065	a	
260	a^5	IV a	剝片		8.1	6.25	3.3(1.3)	83.010	c	No. 6
261	a^5	IV a	剝片		6.27	5.4	0.93(3.28)	39.550	d	
262	a^5	IV a	剝片		2.55	1.51	0.58(0.49)	1.565	a	No.249
263	a^5	IV a	砕片		0.73	0.92	0.18(0.28)	0.150	c	
264	a^5	IV a	ナイフ形石器		1.6	0.64	0.65	0.375	c	
265	a^5	IV a	剝片		3.64	3.09	0.89(1.21)	12.640	a	No.257
266	7	III	剝片		4.02	3.36	0.74(2.1)		d	
1	表　採		剝片	流紋岩	2.24	4.98	1.45(5.81)	8.855	a	
2	表　採		剝片		1.42	1.52	0.18	0.335	d	
3	表　採		剝片		3.81	1.2	0.31	1.205	d	
4	表　採		剝片		4.36	3.66	0.54	7.17	a	
5	表　採		コアブランク		4.95	4.6	2.2(4.1)	44.49	b	
6	表　採		剝片		3.44	4.45	0.63(1.75)	16.40	a	No.142

大分県大野郡駒方古屋遺跡の堆積物に含まれる火山噴出物と層序

柴　田　喜太郎
広島大学理学部地鉱教室

はじめに

駒方古屋遺跡は大分県大野郡大野町中原にあって、南に流れる田代川の西岸、高度約230mの台地上に位置する。駒方古屋遺跡が位置するこの地域は大野原と呼ばれ、阿蘇火山東麓から東に広がる丘陵地で、阿蘇・九重火山の新期の噴出物が分布する地域である。

駒方遺跡は大分県教育委員会により、農地改良事業に先だつ緊急調査が行われており、その際には弥生時代～旧石器時代におよぶ遺物が発見されている。今回調査が行われた地点は大分県教育委員会による調査地点に接し、調査担当者により多くの遺物が検出されている。

筆者は別府大学付属博物館による駒方古屋遺跡の発掘調査に際して、土壌試料を採取させていただいた。筆者は駒方古屋遺跡が位置する地域に中・南部九州の火山による噴出物が分布することに着目し、堆積物中に含まれる火山噴出物の検出を試みた。その結果、いくつかの興味あることが明らかになったので報告する。

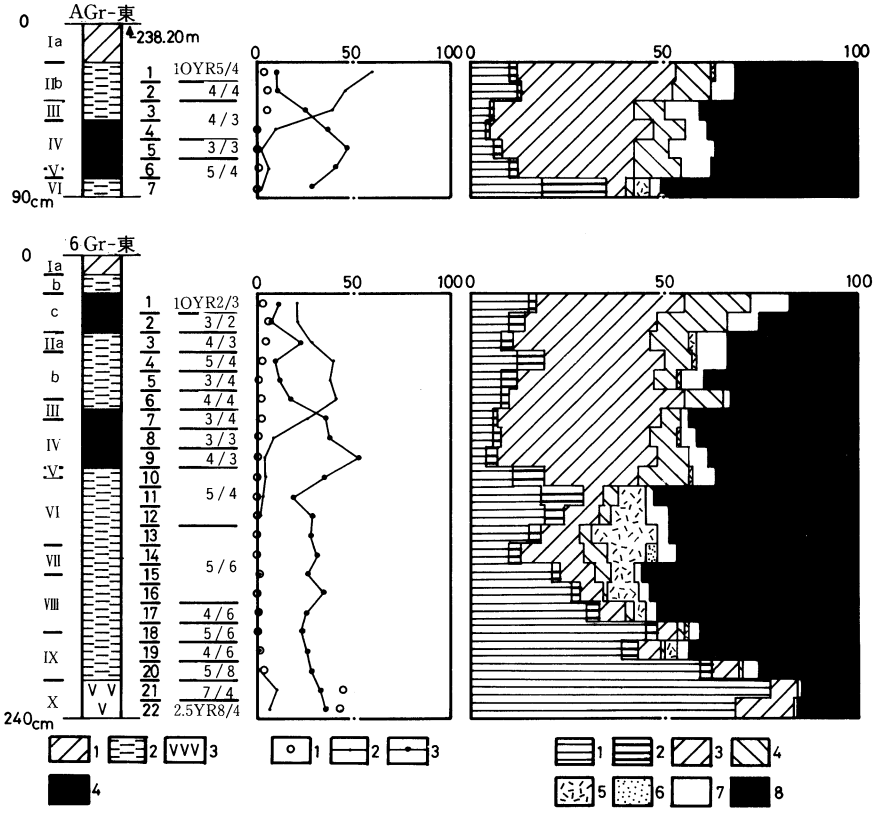
本報告をまとめるに当り、土壌試料の採取をお許し下さった別府大学文学部考古学研究室橘昌信助教授ならびに関係各位、火山ガラスの屈折率の測定を賜わった群馬大学教育学部地学教室新井房夫教授に対して、深甚なる謝意を表する。

堆積物の概要および試料と分析方法

堆積物の概要：分析に供した試料は6グリッド東壁とAグリッド東側の2地点より採取した。各々の地点には第1図の柱状図に示した堆積物が見られる。次に堆積物の概要を述べる。

6グリッド東壁地点の深掘溝は地表より2m40cmの深さがあり、耕作土である最上部のⅠa•b層（層厚20cm）を除き、最下部まで22試料を採取した。柱状図にも示したようにⅠc層（層厚さ20cm、試料1～2）とⅢ層下部～Ⅳ層（層厚30cm、試料7～9）に黒褐色シルトからなる暗色帯がある。上位の暗色帯とその下に続く黄褐色シルトとの間には、直線状の明瞭な境界があるが、下位の暗色帯では、その下に続く堆積物に向かって色調が漸移する。6グリッド東壁地点では、深掘溝の最下部にあるX層（層厚20cm＋、試料21～22）に風化した軽石がある。この軽石は駒方古屋遺跡の略北西に位置する九重火山の噴出物（Kjp 1）とされている（小野、1963）。また、下位の暗色帯と軽石層の間には黄褐色シルトを主とする堆積物があり、その中でⅦ層下部～Ⅸ層（層厚60cm、試料15～20）の範囲には、黄褐色シルト中に褐鉄鉱の斑点が見られる。

Aグリッド東側地点は、6グリッド東壁の南西にあって地表より深さ90cm、第1図の柱状図に示した堆積物がある。試料はⅠa層（耕作土、層厚20cm）を除いて、その下位の堆積物70cmについて採取した。この地点の堆積物は6グリッド東壁地点で見られたⅠb～Ⅱa層を欠徐してⅠa層が直接にⅡb層上にある。



第１図　分析結果

第１図
柱状図凡例
１：耕作土　２：シルト　３：軽石
４：有機質シルト
分析値凡例
１：火山ガラス附着重鉱物含有率(粒数%)
２：火山ガラス含有率(粒数%)
３：重鉱物含有率(重量%)
重鉱物組成凡例
１：普通角閃石　２：酸化角閃石
３：斜方輝石　４：単斜輝石
５：雲母類　６：橄欖石
７：その他　８：不透明鉄鉱物

II b～III層は暗褐色シルト、IV～V層は有機質に富む黒褐色シルト、 VI層は黄褐色の粘土質シルトである。 調査担当者によるとIII～IV b 層の範囲から遺物が採取されている。

試料の採取方法：分析に供した試料は第１図に示した２地点において、耕作土と考えられる堆積物を除き、全層を厚さ10cmに区分して壁面に見られる全ての堆積物を採取した。

分析方法

火山ガラス含有率（粒数%）：風乾試料約100ｇを115#（0.125mm）と250#（0.0625mm）の篩を用いて篩分し、両篩の間に残る微粒砂を用いて散布プレパラートを作製、偏光顕微鏡下で鉱物粒250～300粒中の火山ガラスの含有率を求めた。

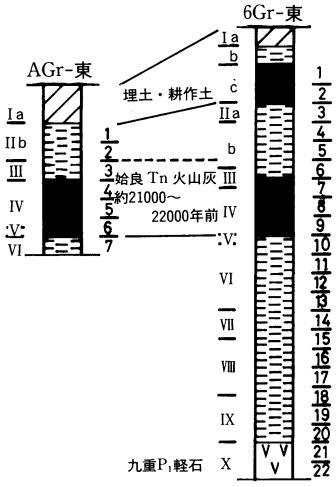
重鉱物含有率（重量%）：火山ガラス含有率を求める為に分離した微粒砂を用いて、試料３～５ｇ中に含まれる重鉱物をテトラブロムエタン(SG2.965)により分離した。重鉱物含有率は試料中に占める重鉱物の重量%である。

火山ガラス付着重鉱物含有率（粒数%）：試料より分離した重鉱物の散布プレパラートを作

り、偏光顕微鏡下で重鉱物250～300粒中に占める火山ガラス付着重鉱物の粒数％を求めた。

重鉱物組成(粒数％)：重鉱物の散布プレパラートを用い偏光顕微鏡下で、重鉱物250～300粒中に占める各鉱物種毎の粒数組成％を求めた。検討した重鉱物種は第１図凡例に示した８種類である。

火山ガラスの屈折率：火山ガラス含有率の検討結果により、火山ガラスの含有率が高い試料について屈折率を浸液法により測定した。



第２図　AGr-東と6Gr-東地点の堆積物の対比

分析結果

第２図に示した。次にその概要について述べる。

火山ガラス含有率(粒数％)：火山ガラス含有率はII b～III層とX層に高く他の層準では低い。

重鉱物含有率（重量％)：重鉱物含有率はII b層よりも上位の層準に低く、下位の層準に高い、特にIII層の下部～IV層の上部に高く、これは６グリッド東壁とAグリッド東側の両地点の堆積物に共通する。

火山ガラス付着重鉱物含有率(粒数％)：火山ガラスが付着する重鉱物は６グリッド東壁のX層に多く、他にII b層下部～III層にかけて微量の増加が見られる。Aグリッド東側地点ではII b層に５％前後含まれる。

重鉱物組成(粒数％)：６グリッド東壁地点の堆積物を例に述べる。この地点の堆積物は重鉱物組成の特徴により、II a～IV層、V～VIII層、IX層、X層に４区分することができる。第２図にも示したように、II a～IV層の範囲には斜方輝石が著しく多く、角閃石類は少ない。V～VIII層では不透明鉄鉱物が多く、雲母類と角閃石類が増加し輝石類は少ない。この層準の試料14には少量の橄欖石が含まれている。IX層では下位に向って角閃石類が増加する傾向を示す。この層準は下位のX層からVII～VIII層に続く漸移部分と考えられる。X層は風化した軽石からなり、普通角閃石、斜方輝石、不透明鉄鉱物からなる単純な重鉱物組成を示す。

Aグリッド東側地点の堆積物は重鉱物組成でも明らかなように、６グリッド東壁地点のIV層よりも上位の堆積物に近似した組成を示す。

火山ガラスの屈折率：Aグリッド東側地点の試料３～５について検討した。その結果、３試料に含まれる火山ガラスの屈折率のレーンジは全て1.498～1.500にあって、この火山ガラスは全て姶良 Tn 火山灰に含まれるものである。

考　察

分析の結果、駒方古屋遺跡に見られる堆積物は、いくつかの特徴によって層序区分することができた。すなわち、深掘溝６グリッド東壁地点の堆積物は第２図の分析結果にも明らかなように４層に区分できた。この層序区分はAグリッド東側地点の堆積物の分析結果とも対応し、６グリッド東壁地点の堆積物のIV層よりも上位の堆積物に相当することが明らかになった。

Aグリッド東側地点の堆積物の試料３～５は火山ガラス含有率が高い。この火山ガラスの屈折率を検討した結果、この火山ガラスは姶良 Tn 火山灰(姶良カルデラ、約21000～22000年前、

町田・新井、1976）にともなうものであることが明らかになった。重鉱物組成の傾向を考慮すると、V層よりも上位に見られる斜方輝石の増加は姶良 Tn 火山灰の降灰に関係することは確実である。Aグリッド東側地点のIV～V層と6グリッド東側地点のIII層下部～IV層に見られる暗色帯の最下部付近が姶良 Tn 火山灰降灰時の地表面と考えてよいであろう。

分析の結果にもとづき6グリッド東壁とAグリッド東側地点の堆積物は第2図のように対比することができる。

結　論

駒方古屋遺跡の6グリッド東壁およびAグリッド東側地点の堆積物を検討した結果、両地点の堆積物から姶良 Tn 火山灰（姶良カルデラ、約21000～22000年前、町田・新井1976）が検出された。さらに6グリッド東壁地点の堆積物には、最下部（X層）に九重 P_1 軽石がある。姶良 Tn 火山灰と九重 P_1 軽石の間には、角閃石類、斜方および単斜輝石、雲母類を含み、一部に橄欖石を含む堆積物が検出された。これは火山ガラスが少なく、重鉱物が30重量％含み火山噴出物の存在が考えられる。今後の検討を要する。

参考文献

小野晃司（1963）：5万分の1地質図幅「久住」および説明書、106P、地質調査所

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰―姶良 Tn 火山灰の発見とその意義、科学、第16巻、6号、P339～342

おわりに

別府大学付属博物館は当館の調査研究活動の１つとして,「大野川流域における先史時代の調査研究」特に旧石器時代の分野を進めている。今回，これまでほとんど手がつけられていなかった後期旧石器時代の古い時期（ＡＴ降下堆積以前）について調査研究の手がかりを大野郡大野町の駒方古屋遺跡の発掘調査で得ることができた。

それらの調査の結果については事実の報告，すなわち調査資料の提示を目的にこの報告書を作成した。遺跡や遺物の考察･所見については今回あえて触れなかった。その理由は，59年の８月から９月にかけて，駒方古屋遺跡の第２次調査を実施し，台地のほぼ中央で，当遺跡での３つめのブロックの一端を発見することができたからである。そのためさらに第３次調査の必要がありその計画がたてられている。

以上の状況を考え，駒方古屋遺跡は第３次調査を含めた上で，当遺跡の性格や特徴・他遺跡との比較さらに時間的位置づけなど，一連の考察を試みたい。また，地質学的な分析結果と考古学的な調査結果について比較検討の必要性を感じている。たとえば第１次調査でのＡＴの位置について問題が残されているように思える。いずれにせよ，十分な発掘調査と整理・分析を通じて，駒方古屋遺跡の調査研究を継続したい。

駒方古屋遺跡の第１次発掘調査では，土地所有者である伊藤昭隆氏をはじめ，大野町中原地区の方々，大分県文化課の方々のお世話になった。また，広島大学の柴田喜太郎氏には土壌分析で手をわずらわせた。

発掘調査および資料整理では，別府大学の学生諸君の協力があった。土居和幸・小林恭子・塚田一成・国井和哉・田中正弘・藤村卓・木村元浩・長友郁子・小村雅美・清原史代。なお，当報告書の執筆の一部は田中の協力によるものである。

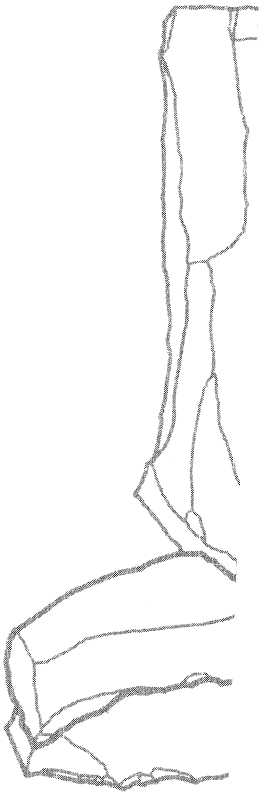
駒方古屋遺跡の発掘および報告書作成は，上記の方々の協力ではじめて行なうことができたのである。心から感謝の意をささげたい。

昭和59年12月

別府大学文学部助教授
橘　　昌　信

駒方古屋遺跡発掘調査報告書

昭和60年2月5日　印刷
昭和60年2月10日　発行

著　者　橘　昌信
編集者　橘　昌信
発行所　別府大学付属博物館
〒874-01　別府市北石垣82

印刷所　佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155の1